



TOHOKU
UNIVERSITY

2014

読書の年輪

— 研究と講義への案内 —



東北大学 教養教育院
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University



｜ 表紙の写真 ｜

東北大学史料館(片平キャンパス)。旧制東北帝国大学の中央図書館として、1924年(大正13年)に竣工。戦災を免れて1965年(昭和40年)までの本学の研究、教育を支えた。現在は、2階の旧学生閲覧室が本学の歴史資料の展示場となっている。

｜ 上の写真 ｜

東北大学百周年記念会館川内萩ホール(川内南キャンパス)。50周年で建造された記念講堂のデザインを可能な限り保存、修復し、第一級級のコンサート専用ホールと同等の非常に高度な環境のコンサートホールの要素を加味した国際会議場である。

2014
読書の年輪
— 研究と講義への案内 —

読書の年輪

— 研究と講義への案内 —



Contents

刊行にあたって	5
教養教育院長 花輪 公雄	
好之者不如樂之者	6
野家 啓一	
自分の夢を社会の夢に	10
—日本と世界の未来について考えよう—	
福西 浩	
すこし離れたところから眺めてみる	14
福地 肇	
若い頃の洋書との出会い	18
前 忠彦	
乱読の履歴	22
—そしてこれからの推薦本—	
工藤 昭彦	
学問とは何か?	26
—大学は何を目指すべきか—	
森田 康夫	
本との出会い	30
—今、君たちだったら—	
海老澤 丕道	
「大学時代でなくても、 できること」ではなく	34
柳父 圓近	
学ぶ本・議論する本・楽しむ本・ 鼻歌まじりの本…出会った本	38
秋葉 征夫	
教育・研究の舞台裏	42
—私を支え・慰め・励ましてくれた本—	
海野 道郎	
本誌の書籍紹介一覧	46

Institute of Liberal Arts and Sciences,

刊行にあたって



読書は、私たちの知識の量を増やし、思考の幅を広げ、さらに疑似体験を通して考える力をつけてくれます。そして、ときには一冊の本で、その後の生き方が決まることもあります。膨大な書籍の中から、一生手元に置きたいようなこれはという一冊の本に出会うことは、この上もない素晴らしい体験で、喜びでもあります。

この小冊子「読書の年輪―研究と講義への案内―」は、本学教養教育院に所属する、教育と研究に高い実績を持つ経験豊かな本学名誉教授である総長特命教授7名と、現在はその任を離れたOB3名の、計10名の先生方が、自らの講義やゼミの受講の際に有益となる本を、お一人6冊ずつ紹介したものです。どれもが定評のある選りすぐりの名著と言えるでしょう。皆さんが、紹介された全60冊の本の中から、先生方の紹介文を参考に一冊でも多くの本を手にとってくださることを期待しております。

読書は豊かな心を作ります。皆さんが確かな教養を身につけるためにも、日常的に読書に親しんでください。

2014年3月

東北大学教養教育院長
花 輪 公 雄

好之者不如樂之者



野家 啓一 NOE, Keiichi

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院文学研究科)、理学修士

専門分野: 哲学、科学基礎論

基礎ゼミ: 「哲学・ゼロからのスタート」／「英語で読む『奥の細道』」

基幹科目: 「思想と倫理の世界: 現代哲学への招待」

哲学・倫理学: 「科学技術の哲学と倫理」

総合科目: 「科学技術と社会」

研究室: 文学部棟9階 E-mail: noe@m.tohoku.ac.jp

「教養」を一言で定義することは難しい。だが、歴史と社会の中における自分の現在位置を知り、自分の考えを的確に表現する〈知力〉と、異質の他者を理解し共感する〈感受性・想像力〉が教養の二本の柱であることは間違いない。そうした力を培うには、読書にまさる手だてではない。書物の中で私たちは自分とは異なる他人の考えに触れ、また自分とは別の人生を追体験できるからである。

私のこれまでの人生（といっても60数年を生きたにすぎないが）を振り返ってみても、いくつかの分岐点で、本との出会いが決定的な役割を果たしてきた。第一の出会いは小学校一年生のときに訪れた。入学して間もなく、私は集団疫病で長期入院を余儀なくされ、心配した親戚の小母さんが見舞いに差し入れてくれたのが、子供向けの『ロビンソン漂流記』であった。それまで漫画や少年向けの講談本（『赤穂義士』や『里見八犬伝』など）しか読んだことのなかった私に、この本は広大な世界を垣間見せてくれた。いわば私の眼前に読書の大航海時代の幕が開いたのである。

第二は物理学との出会いである。中学三年生の時に、友人のK君がジョージ・ガモフの『1, 2, 3・・・無限大』という本を見せてくれた。その表題に惹かれて無理やり借り受けると、これが実に面

白い。私はたちまち相対性理論や量子力学など現代物理学の魅力に夢中になった。当時は工学部の原子核工学科が一番人気であったが、私は躊躇なく理学部の物理学科を志望した。

第三は哲学との遭遇である。私が学生の頃は大学闘争（と私たちは呼んでいた）の真っ最中であり、理系の学生でもサルトルを小脇に抱え、武谷三男『弁証法の諸問題』の読書会を開いていた時代であった。そんな中で手にしたのが廣松渉『世界の共同主観的存在構造』（実際は『思想』に掲載された同題の論文）である。この本の影響がなかったなら、おそらく私は物理学から哲学への無謀な転向など企てなかったに違いない。

そんなわけで、私が皆さんに薦めたい本は山ほどあり、6冊に限定するのは忍びないが、大学時代にぜひ読んでおいてほしいものを中心に文庫や新書からリストアップした。これらはあくまで入口であり、あとは興味関心の赴くまま、芋づる式に読書範囲を拡大していったほしい。そのためには図書館が強力な羅針盤となってくれる。読書は単に知識を得る手段ではなく、何よりも快樂である。楽しまない手はない。『論語』に「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを樂しむ者に如かず」とある通りである。



■ 大森 荘蔵 著

大森荘蔵セレクション

飯田 隆／丹治 信春／野家 啓一／野矢 茂樹編、平凡社ライブラリー、2011年

哲学とは物事を根本に立ち返って「額に汗して」考え抜く作業である。このことを徹底して教えてくれたのは、私の大学院時代の恩師大森荘蔵であった。本書は私を含めその教えを受けた4人の哲学者が、大森の代表的論文を選んで収録した、大森

哲学のアンソロジーである。

哲学の入門書を問われるたびに、私は大森荘蔵の『流れとよどみ』（産業図書）を挙げるのを常としている。本セレクションにもそこから6篇の論文が再録されているので、手始めにそれらを読んでみてほしい。哲学的に考えるとはどのようなことかが、おぼろげながら感得できるに違いない。扱われている主題は「夢」や「記憶」や「ロボット」など、誰でもなじみのある事象である。だが、大森の手にかかると、これら自明の事柄が、たちまち「哲学の謎」と化して巨大な疑問符となる。哲学とは、「自明性」をあえて問い直す勇氣なのである。

それゆえ、哲学は医学や工学のように、直接に社会の役に立つ学問ではない。学生から「哲学は何の役に立つのですか?」と問われるたびに、私は「哲学とは〈役に立つ〉とはどのようなことかを考える学問です」と答えている。いわばメタレベルの視点を獲得すること、それが哲学である。



■ 戸田山 和久 著

「科学的思考」のレッスン 一学校では教えてくれないサイエンスー

NHK出版新書、2011年

東日本大震災と福島原発事故は、われわれの科学と科学者に対する信頼を大きく揺るがせた。平成24年度の『科学技術白書』によれば、「科学技術の研究開発の方向性は、内容をよく知っている専門家が決めるのがよい」との意見に、「そう思う」と答

えた人が震災前は60%あったのに対し、震災後は20%に激減しているのである。

しかし、科学技術に依存した社会に生きている以上、科学技術を過信することも、不信に陥ることも共に危険と言わねばならない。要は、科学の不確実性と技術の不完全性をわきまえた、適切な「科学リテラシー」を身に着けることである。本書は、そのためのまたとない手引きになってくれる。第Ⅰ部「科学的に考えるってどういうこと?」では事実と理論の違い、科学的説明、仮説の検証などの科学哲学的テーマが、第Ⅱ部「デキル市民の科学リテラシー」では科学情報の読み解き方、安全性とリスク評価などの科学社会学的テーマが、噛んで含めるように解説されている。

本書はとくに、科学は苦手と自認する文系の皆さんにお薦めしたい。原発再稼働の是非を論じ、遺伝子組み換え作物の安全性を議論するのに、科学が苦手では話にならないからである。



レイチェル・カーソン 著

沈黙の春

青樹 築一訳、新潮文庫、1974年

「核実験で空中にまいあがったストロンチウム90は、やがて雨やほごりにまじって降下し、土壌に入り込み、草や穀物に付着し、そのうち人体の骨に入りこんで、その人間が死ぬまでついてまわる。だが、化学薬品もそれに劣らぬ禍いをもたらすのだ」。カー

ソンがこのような警告を発したのは、今から50年前、1962年のことである。

現在でこそ「環境破壊」や「環境保護」はグローバルな政策課題となっているが、カーソンが本書を刊行した当時は、核兵器の開発競争が拡大の一途をたどる東西冷戦のまただ中であった。それゆえ、DDTのような殺虫剤や除草剤などの化学農薬が自然環境に与える壊滅的影響を実証的データに基づいて告発したカーソンの著書は、反響を呼ぶ一方で反発を買い、逆に彼女は化学薬品会社などから非難中傷を浴びることとなった。だが、彼女はそうした圧力に屈せず、自らの主張を貫き通し、やがてはアメリカ政府をも動かして農薬の使用制限へと踏み切らせた。その意味で本書は「環境倫理」の原点であり、バイブルでもある。

DDTの発見者パウル・ミュラーはノーベル賞を受賞したが、ノーベル賞はむしろカーソンのような研究者にこそ与えられるべきであろう。



柳田 國男 著

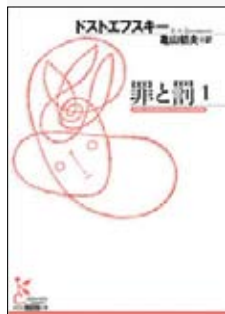
遠野物語

集英社文庫、1991年

現代の最先端の科学と言えば、それを代表するのはやはり脳科学であろう。脳科学の発展は目覚ましく、暗黒大陸と呼ばれた脳の機能を明らかにすることによって、やがては「心」の本性の解明にまで迫ろうとする勢いである。

だが、フロイトによる「無意識」の発見を持ち出すまでもなく、人間の心が抱え込んでいる底なしの深淵は、やわな現代科学のメスが届かないほど広くかつ深い。その深淵に民俗学という方法をもって測鉛を下ろそうとしたのが柳田國男であった。彼は私たち日本人の生活意識あるいは心性（心の傾き）の構造を書かれた文書史料の中にはなく、祖先から口伝えに伝承されてきた多種多様な物語や伝説の中に探ろうとした。

その最初の成果が本書『遠野物語』にほかならない。これは若手県遠野出身の文学者佐々木鏡石から柳田が聞き取った「聞き書き」である。だが、簡勁な擬古文によって綴られた幻想的な物語世界は柳田の筆力の賜物であり、彼が序文で「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と自負しただけの迫力を蔵している。かつて三島由紀夫が本書の第22話（通夜の幽霊話）を「この小話は、正に小説」と呼んだのも頷けるところである。



ドストエフスキー 著
罪と罰（1～3）

亀山 郁夫訳、光文社古典新訳文庫、
1:2008年、2・3:2009年

大学時代は夏休みなどを利用して、ぜひ内外の長編小説に挑戦してみたい。社会人になってしまえば、時間的にも心理的にも、長編小説に取り組もうという余裕はめったに訪れるものではない。

私が最初に読んだ長編小説は、ロマン・ロランの

『ジャン・クリストフ』である。ベートーベンをモデルにしたと言われるこの大河小説の一節が、中学校の国語教科書の中に採録されていたのが呼び水となった。教科書と同じ豊島与志雄訳を手に入れて、ようやく読了したのは高校三年の夏休みだったと記憶する。

ちょうどその頃、中央公論社から『世界の文学』という文学全集が刊行され始め、親にねだって揃えてもらったが、その第一回配本がドストエフスキーの『罪と罰』（池田健太郎訳）であった。簡単に言えば、主人公の大学生ラスコーリニコフが金貸しの老婆姉妹を殺して金を奪い、やがて娼婦ソーニャの純粋な魂に触れて回心し、自首してシベリアへ送られるまでの物語である。

殺人事件を主題にしているという意味で、『罪と罰』は一種の倒叙型の推理小説としても読むことができる。予審判事ポルフィーリーとの対決など、ワクワドキドキ感をぜひ味わってほしい。



寺山 修司 著
寺山修司全歌集

講談社学術文庫、2011年

「職業は寺山修司」と豪語した言葉の天才が亡くなって早や30年になる。私が学生時代を過ごした1960年代後半から70年代を通じて、寺山修司は短歌、俳句、現代詩、小説、評論、演劇、映画、作詞、競馬等々、行くところ可ならざるはなし、と

いった勢いの「時代のヒーロー」であった。

数ある称号の中で、私が出会ったのは、歌人としての寺山修司である。高校二年の初夏、たしか国語の時間でのこと、隣の席のK君が何やら熱心に教科書の下で隠し読んでいる。先生の目を盗んで回し読みしたその本こそ、後に映画にもなった寺山修司歌集『田園に死す』（本書に収録）であった。そこには国語教科書に出てくる短歌とは似ても似つかない異貌の世界が開かれていた。

「間引かれしゆゑに一生欠席する学校地獄のおとうとの椅子」

「たった一つの嫁入道具の仏壇を義眼のうつるまで磨くなり」

「かくれば鬼のままにて老いたれば誰をさがしにくる村祭」

これらの歌のもつ言葉の毒に圧倒され、私は授業が終わったのも気づけなかった。私にとっての詩歌開眼である。「花には香りを、本には毒を」。

自分の夢を社会の夢に — 日本と世界の未来について考えよう —



福西 浩 FUKUNISHI, Hiroshi

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院理学研究科)、理学博士

専門分野:超高層物理学、宇宙空間物理学

基礎ゼミ:「未知への挑戦－南極観測から学ぶ」／「宇宙天気予報に挑戦しよう」

展開ゼミ:「惑星探査技術を学ぶ」

基幹科目:「雷放電から探る地球環境変動」

総合科目:「急成長する中国の科学技術と経済」／「オーロラから探る宇宙環境」

研究室:教養教育院プレハブ棟2階 研究室4 E-mail : hfukunishi@m.tohoku.ac.jp

私が中学1年生の1957年に世界初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げがあり、南極に昭和基地が開設されるという出来事があった。これに刺激されて南極で宇宙空間の現象であるオーロラを研究することが自分の夢になった。東京大学に入学し、第1次南極観測隊長を務めた永田武教授の研究室で研究を始め、夢の実現に近づいた。そして大学院博士課程の時に南極観測隊に参加し、昭和基地でオーロラの越冬観測を行った。この観測結果を基にした博士論文が世界的に認められ、米国のベル研究所に2年間留学した。その後国立極地研究所に入り、南極観測事業の推進役として3度南極観測隊に参加し、越冬隊長や夏隊長も務めた。1986年に東北大学理学研究科に移り、南極・北極でのオーロラ研究に加えて、人工衛星を用いた宇宙空間と惑星の研究を新たに始めた。研究室では多数の大学院生がさまざまな研究に挑戦し、国際的にインパクトのある素晴らしい研究成果を上げて果立って行った。

こうした経験から、大学は学生たちの夢を実現する場でなければならないと確信するようになった。東北大学が目指す「研究第一主義」による教育も、学生と教員が一体となった世界レベルの研究チームが創り出されることが前提だ。大学院の学生た

ちはこうした研究チームに参加することによって新しい研究領域に挑戦する意欲が掻き立てられる。しかし学部の学生たちは研究チームの一員となる前の段階なので、別のやり方で知的好奇心を高める必要がある。

高校までの学びは受験勉強中心なので、いかに効率的に学習するかに焦点を当て、文系・理系別の受験科目に絞った学習が当たり前になっている。しかし現在のグローバル化した社会で活躍するには特定の分野の知識だけでは全く役に立たず、分野横断的なコラボレーション能力やコミュニケーション能力が必須となる。それを身につけるにはまず教養教育で知的好奇心を高め、いろいろな分野に興味をもち、視野を広げていく必要がある。インターネットは広範囲な知識を瞬時に得るという点では優れているが、視野を広げるという点では読書の方がはるかに優れている。一冊の本をじっくり読むことによって、著者の視点や考え方が分かり、「自分だったらどう考えるか」と思索を巡らすことができる。大学の学びの最初の段階で最も重要なことは他人の考えの受け売りではなく、自分流の考え方を確立していくことだ。ここで紹介する6冊の本をとおして自分の夢を社会の夢に高める道について考えてみよう。



トクヴィル 著

アメリカのデモクラシー (第1巻上・下、第2巻上・下)

松本 礼二 訳、岩波文庫、第1巻2005年、第2巻2008年

日本は戦後アメリカの指導によってアメリカ流「デモクラシー」の国に変貌し、歴代首相は世界とアジアの安定のために日米関係が最も重要だと言いつけてきた。しかしアメリカ流「デモクラシー」の本質をきちんとと言える日本人はあまりいない。

1831年、フランスからやって来た25歳のアレクシ・ド・トクヴィルが271日間でアメリカ各地を巡っただけで、その旅から得られた情報を基にデモクラシーの本質を鋭く浮かび上がらせる歴史的名著を書き上げた。

地域の自治を基本にした民主制、州と連邦の関係、大統領制、選挙の仕組み、宗教と政治の関係、なぜ市民の集団的な力の方が国家の権威よりも社会の福利をもたらす力が強いのかなど、民主主義の良いところと悪いところを詳細に分析した。個人同様、国民もその生涯の主要な特徴は若い時分から現れると考え、当時は数百万人しか住んでいなかった北アメリカに、将来はヨーロッパ全土に匹敵する1億5000万人もの互いに平等な人間が住み、世界第一の海洋大国になるだろうと予言し、見事に的中させた。著者の鋭い分析法は私たちが今日、デモクラシーの本質を理解し、日本と世界の未来を考える上できわめて有用である。



クロード・レヴィ=ストロース 著

野生の思考

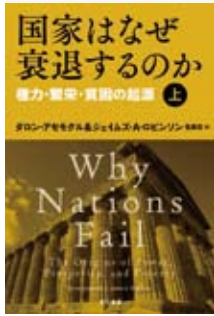
大橋 保夫 訳、みすず書房、2006年

1960年代、日本では多くの学生がマルクス主義や実存主義に魅せられ、学生運動が盛んであった。しかし1970年代に入り社会主義国の経済は行き詰まり、社会主義国家を理想とする学生運動は急速に衰退していった。マルクス主義や実存主義に代わっ

て登場したのが構造主義で、その基礎を創ったのがレヴィ=ストロースである。

本書は、歴史には「鉄の必然性」をもって貫徹する発展法則があるとし、「未開人」と「文明人」を区別する西洋中心主義のパラダイムを一変させた歴史的書物である。未開社会の「野生の思考」と「近代科学の思考」が同じように合理的な科学的思考であるとし、野生の思考こそが人類に普遍的な思考であることを「トテムの分類」や「プリコラージュ(器用仕事)」などの諸事例に共通する構造を抽出することによって示した。

ここで用いられる「構造」という言葉は「要素間の関係」を示し、この関係は「変換」を通して不変であるものと定義される。構造主義での変換の概念は数学の射影変換や位相変換に対応しており、自然や社会の複雑な事象から変換を通して不変な構造を取り出す思考方法は、日本と世界の未来を考える上できわめて有効な手段となろう。



■ ダロン・アセモグル / ジェイムズ・A・ロビンソン 著
国家はなぜ衰退するのか
一権力・繁栄・貧困の起源一(上・下)
 鬼澤 忍 訳、早川書房、2013年

2011年のチュニジアでのジャスミン革命に端を発した大規模な反政府デモと抗議活動は『アラブの春』と呼ばれ、リビアやエジプトなどの周辺国に急速に拡大していった。貧困と格差、政府の腐敗と抑圧に対する民衆の強い怒りがこうした活動の背景

となっている。では世界にはなぜ豊かな国と貧しい国が存在するのだろうか。これまでの理論ではこの不平等を地理的条件や文化的条件などで説明しようとしたが、韓国と北朝鮮の例で明らかのように、うまく説明できていなかった。

著者たちは15年に及び独創的な共同研究の成果をもとに、社会科学におけるこの最大の難問に挑み、きわめてシンプルなメカニズムを導き出した。すなわち、包括的 (inclusive) な経済制度 (開放的で公平な市場経済) に支えられた包括的な政治制度 (自由民主政)こそ持続可能な繁栄 (好循環) の鍵であり、逆に、収奪的 (extractive) な政治制度 (権威的な独裁等) と収奪的な経済制度 (奴隷制、農奴制、中央指令型計画経済等) が悪循環を生み出すことを世界各国の膨大な歴史的事例から明らかにした。このメカニズムは世界中で進行中の紛争と国家間の対立の原因を究明し、日本の将来を考える上で大きなヒントを与えてくれる。

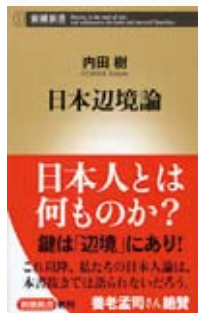


■ ジュリアン・ジェインズ 著
神々の沈黙
一意識の誕生と文明の興亡
 柴田 裕之 訳、紀伊國屋書店、2005年

古代から現代にいたるまで人々は意識の問題と格闘してきたが、いまだに解決されていない難問である。著者は世界各地の文明の起源と変遷を、歴史、宗教、人類学、心理学、哲学、文学など多面的な視点で探求し、意識は BC2000年頃に誕生し

たという大胆な仮説を提示する。ホメロスの『イーリアス』の分析から、命令を下す「神々」(右脳) とそれに従う「人間」(左脳) に二分された心を『二分心』と名づけ、古代の神聖政治では死せる王を神として王がその声を聞いて政治を行っていたことが示される。

しかし BC2000年頃になると二分心が衰退し、王が神々の声を直接聞くことができなくなり (神々の沈黙)、宗教的儀式・祈祷・占いによって王の権威を保つようになる。さらに BC1000年頃になると一神教の神が登場し、神は命ずる神から人間の罪を赦す神へと変化し、神の命を受けた王が道徳による政治を行うようになる。意識は脳というハードウェアの進化から生まれたのではなく、言語による学習によって脳が新しいソフトウェアを獲得した結果であるという著者の独創的なアイデアは、文明の興亡を理解する上で、また宗教と科学の関係を考える上できわめて有用である。



■ 内田 樹 著

日本辺境論

新潮新書、2009年

明治維新、戦後復興と二度の奇跡をやり遂げた日本人が3.11東日本大震災後の日本新生をやり遂げるには、まず日本や世界が抱える諸問題について一人ひとりが自分の頭で考えていくことが必要だ。その際に参考になるのが本書である。著者の専門

はフランス現代思想だが、武道家でもあり、さまざまなジャンルの著書があり、ユニークな論理を展開している。

本書で著者は、常にどこかに「世界の中心」を必要とする辺境の民が日本人であり、日本人固有の思考や行動は世界から見ればかなり特殊であると述べる。「世界標準からこんなに遅れている」と言われると日本人は必死になって「キャッチアップ」しようとするが、「国際社会はこれからどうあるべきか」という種類の問題になるとたんに口をつぐんでしまう。

しかし辺境人の優れた才能として著者は学びの効率がよいことを指摘する。学びは学んだ後になってはじめて学んだことの意味や有用性について語れるようになる。そこで外来の知見に無防備に身を拡げることが多くの利益をもたらすことを日本人は歴史的経験から習得しており、「学ぶ力」こそ日本の最大の国力であると著者は主張する。



■ ヘンリー・A・キッシンジャー 著

キッシンジャー回想録 中国(上・下)

塚越 敏彦／松下 文男／横山 司／岩瀬 彰／中川 潔 訳、岩波書店、2012年

尖閣諸島をめぐる対立によって日中関係の将来が心配されているが、現在日本の貿易相手国は輸出とも中国が全体の20%ほどを占めて第1位になっており、日中はすでに一体化した経済圏を形成している。また2008年に戦略的互惠関係の推進に関す

る日中共同声明が出され、友好関係を発展させる基盤はでき上がっている。私は2007年に日本学術振興会が開設した北京センターの初代所長として4年間北京に滞在し、日中学術交流を推進する仕事をしてきたが、教育と科学技術に関する両国の交流も急速に発展している。

著者のキッシンジャー博士は1972年のニクソン訪中による米中国交回復の実現のために活躍した人物として歴史に名を残しているが、本書では世界の人人々をあっと言わせたこの出来事が「地政学的な発想」と中国の歴史と中国人の考え方を深く理解することによって初めて実現したことを詳しく解説してくれる。私たちは表面的な米中対立に目を奪われがちであるが、キッシンジャー博士は本書の中で、「これからの米中関係を適切に表現すれば、それは協力関係というよりも『相互進化』であろう」と述べている。『相互進化』はこれからの日中関係においても強く求められる。

すこし離れたところから眺めてみる



福地 肇 FUKUCHI, Hajime

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院情報科学研究科)文学博士
専門分野:英語学、機能言語学

指導科目

基礎ゼミ:「『ことば』の世界に迷い込んでみませんか」

展開ゼミ:「『ことば』の世界を探索してみませんか」

共通科目:「英語A1」／「英語A2」／「英語B1」／「英語B2」／「英語C2」

研究室:教養教育院プレハブ棟2階 研究室6 E-mail:fukuchi@m.tohoku.ac.jp

私は、昭和50年に東北大学に赴任し、平成24年に定年退職しましたが、その間37年、川内キャンパスで1、2年生のための英語の授業を担当してきました。学部や大学院で専門とする英語学や言語学の指導もしましたが、教養（一般）教育の英語の教室で、入学して間もないフレッシュな学生の皆さんに楽しく接してきたことが、英語教師としての私の大きな、そして大事な部分を占めています。

外国語の教室の風景は、昔と今とではかなり変わってきたように見えますが、本質的なところではあまり違いはありません。教材を読み、書き、聴き取り、話すといった基本的な作業が中心となります。紙の辞書から電子辞書に移ったことが以前との目立った違いでしょうか。

このような外国語（英語）の学習に直接参考になる本は無数にあるでしょうが、今回は別の観点から紹介します。教室の内外で意識的に外国語の勉強をしているうちに、「これは何となくおもしろい言い方だ」「日本語ならどう言ったらぴたりするだろう」「（人間の）ことばって不思議な（あるいは不合理な）ものだ」という思いを抱くことがあると思います。これは、外国語という、いま勉強している対象を、少しでも離れたところから眺め直した時に感じるものかもしれません。私は本年「ことばの世界

に迷い込んでみませんか」という題目の基礎ゼミを担当しましたが、これは、特に外国語の学習のためではなく、素直な気持ちで身近にあることばを眺めてみようという趣旨です。しかし、そこで何かを見つけたら、外国語に対する新しい見方ができるようになる可能性があります。

このような姿勢は、何も外国語の学習だけにあってはまるものではありません。「どんな学問分野に進むにせよ、その研究分野の歴史をまず勉強しなければならぬ」という言葉を聞いたことがあります。要するにいきなり作業にはいるのではなく、全体が見えるところから眺めてみる、ということでしょう。私は、自分の専門の勉強をしているときにも、どちらかというと「その周辺」にあることがむしろ気になる性質でした。その周辺から自分の論文の対象となっている事象を眺めることが多かったといえます。

以下で紹介する6冊は、少しわき道によって、ことばとその周辺にあるものを考えながら外国語の学習を続けていったらどうだろうというつもりで選んだものです。



■ 岩波新書編集部 編

英語とわたし

岩波新書、2000年(品切重版未定)

英語の参考書は無数にあり、さまざまな角度から英語に関して論じた書籍も数え切れないほど、私たちにとって英語は大きな関心事である。英語を使えるようになりたいと多くの人が願いながら、挫折を味わうというのも現実である。

本書は、各界で活躍している23人の体験的英語論である。政治家、学者、ジャーナリスト、ビジネスマン、スポーツ選手、音楽家など、さまざまな分野の人が仕事をする中で英語とどのように関わって(あるいは格闘して)きたかを淡々と話している。この中にはもちろん英語の達人もいるのだが、英語を専門的に勉強してきた人はいない。みな、日本の学校で教育を受け、あくまでもそれぞれの仕事のなかで英語を勉強してそれを使っている人たちである。また、英語をどのように学びどのように使っているかだけでなく、優れた仕事をする人たちが国際共通語である英語を(あるいはそれを使うこと)をどう考えているのかもわかる。皆が皆、英語を使うことを無批判に肯定しているわけではない。なかには皆が英語に向いている現状に少し立ち止まってみることも必要だという人もいて、面白く参考になる。



■ 中村 保男 著

翻訳の秘訣：理論と実践

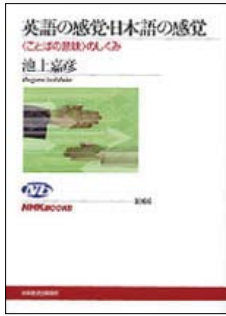
新潮選書、1982年

『翻訳』に関して書かれたものの中には達人による自慢話や苦労話、失敗談になっているものが少なくないが、本書はそんなところは一切なく、副題からわかるように、翻訳の本質について述べるとともに、翻訳の実際の作業をできるだけ体系的に

整理し、翻訳を通して日本語の表現力・表現力を身に付ける方向を目指している。

ふだん外国語の学習をしている学生の皆さんにとっては、『翻訳』とは極めて特殊な専門的な作業であると思うかもしれない。実際そういう面はあるが、本書は、中学校・高校で英語の基礎を学んだ人の語学的な知識を前提として、英文和訳・英文解釈を卒業して翻訳にいたる道筋を教えてくれる。つまり、外国語学習の一つの行き着く先が優れた翻訳であるという視点から、著者の示す道筋は、見えないところで言語学的な基盤と根拠に基づいている。たとえば、著者は「日本語・英語間の語順の違いは文法の違いによるものでいたしかたがないが、『節』順は両者ともに基本的に変わらない」というが、これは機能言語学の基礎でもある。

自分の持つ外国語力をさらに伸ばしたい方には一読をお勧めする。



池上 嘉彦 著

英語の感覚・日本語の感覚： 〈ことばの意味〉のしくみ

NHKブックス、2006年

外国語という科目の中で具体的に学がものは、外国語の発音であり文法であり単語（語彙）である。それを学び知った後に、読む、聞く、話す、書く、といった実際的な技能を身に付けることが外国語学習の目的である。しかし、文法に適った文の形

を作り適切な語彙をそこにはめ込み、それを正しく発音しても適切な言語コミュニケーションになるわけではないことは、私たちが日常感じているところである。

本書は、文法と（辞書があたえる）意味のできた文の骨格にどのような肉付けをすることによって「自然な」（英語らしさ、日本語らしさ、など）表現ができるのかを、系統的に考察したものである。たとえば、同じことを言うのに、「（私には）星が見える」（自動詞型）というのが日本語のであるのに、英語では「私は星を見る」（他動詞方）という言い方が普通である。このようなことは英語の教室で先生が何かの機会に話をしてくれるのだが、本書では、文法書や辞書だけではわからない言語表現の豊かさを、言語学の視点から論じたものである。

「ことばにこだわる」方面には何かの参考になると思う。



井上 ひさし 著

日本語教室

新潮新書、2011年

2010年に惜しまれて世を去った著者は、すぐれた小説や戯曲を数多く残しただけでなく、日本語について深い見識をもった作家として知られる。「私教版日本語文法」「自家製文章読本」のようなタイトルの日本語論が数多く、言語学者や日本語学者が思

いもつかない現象に目を向ける鋭い観察眼の持ち主である。新聞の不動産広告に見られる最小の字数で最大の情報を伝える手法の分析など、あっと驚くセンスがある。

本書は、これまでの身の回りの気がつきにくいことばの現象を論じるよりは、もう少し言語を正面から見据えて日本語のすがたを論じたものである。しかし、講演の記録をもとにしたということもあり、決して堅苦しいものではなく、「レモンティー」ではなく「レモンテ」が正しい、というような例を出して日本語の音韻の特徴をさりげなく教えてくれる。

しかし、この本から読者が感じる最大のものは、日本語にたいする著者のやさしい眼差しであろう。「ことばの乱れはいつの世にもある」「ことばとは精神そのもの」「グローバリゼーションは危険だ」などという言い方から、日本人が大事にすべきことばに対する、著者の限らない愛情を感じる。



鈴木 孝夫 著

ことばと文化

岩波新書、1973年

言葉が違えば文化も違う、というのはいわばあたりまえのことで、決してめずらしい見かたではないが、どのように、と訊かれると困ることがある。ことばが人間の思考や文化の形態を決める、というのが言語相対論という言語観であるが、どの程度決

定するのかによって、弱い仮説と強い仮説がある。

こういう議論をするときによく出される例や話題は、日本の幼児は太陽を書かせる赤いフレヨンを使うが、黄色を使う国もある、とか、ピーターパンの挿絵に出てくるワニは緑色である、という他愛のないものもある。

本書の中心的内容となっている日本語の呼称体系は、ことばがいかに日本人の人間関係の形成に関わっているかを知るうえで考えさせられる。親は子を固有名詞や代名詞で呼び、子は親をお父さん・お母さんと普通名詞で呼ぶ、子に対して親は自分のことを普通名詞で呼び、子は代名詞を用いる。小学校低学年担当の先生も自分を普通名詞で指すことがある。また、職場の上司は部下を固有名詞で呼ぶが、部下は上司を課長などの普通名詞で呼ぶ、など、いわば整然とした体系をなしていると思われる。ことばが文化的基盤の形成にどうかかわっているか、その様子がよくわかる。



中西 進 著

日本の文化構造

岩波書店、2010年

タイトル通りの内容であり、タイトル通りの堅い本である。今回紹介した6冊の本のなかでは一番高度な内容になると思うが、それほど難解というわけではない。講演や学術誌に載せた論文を収集編集したもので、体系立てて書かれたものではなく、そ

の点では気楽に読めるとも言える。

著者は高名な万葉学者であり、縄文の時代にさかのぼって現在までの日本文化を特徴づける話題を拾って論じているが、それを通して日本文化と他の文化のパターンの違いに目を向けているように思う。たとえば、日本の建物をふくめた構築物は平面的に広がるパターンがあるのに対し、西洋のそれは垂直に伸びようとするパターンがある、という指摘がある。代表的な建築、たとえば野山を借景とする寝殿造りと、何百年もかけて完成されるゴシックの大聖堂を思い浮かべればすぐに実感することであるが、無秩序に広がる日本の団地と、2本の道路が交差するだけで出来上がり番地の付け方まで決まるアメリカ西部の小さな町にまで話題が広がる。

英語教師の私は、ここから、節を並列させたがる日本語と節を積み上げたがる英語の文（節）の構成パターンの違いを想う。

若い頃の洋書との出会い



前 忠彦 MAE, Tadahiko

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院農学研究科)、農学博士

専門分野:植物栄養生理学(作物の生産性に関わる生理・生化学、栄養学)

基礎ゼミ:「植物の独立栄養性」を検証する／「ヒトの暮らし・文化と植物の多様な関わり」

基幹科目:「地球の命を支える“光合成”をひもとく」

総合科目:「植物面白考—巧みな生存戦略と私達の暮らし」

研究室:教養教育院プレハブ棟2階 研究室3 E-mail:hmae@m.tohoku.ac.jp

私はこれまで、植物栄養学、光合成、作物の生産性に関わる生理・生化学等について、研究と教育を行ってきた。ここでは、若い頃の洋書との出会いについて述べたいと思う。

学部時代、運動部で部活動中心の生活を送っていた私は4年で卒業して社会に出るには心もとなく、大学院に進んで勉強しなおすこととした。

私が大学院生となった1960年代後半は生化学の研究が盛んで、私が所属した研究室では米国から帰国後間もない助教授を中心に、植物のアミノ酸に関する研究が活発に行われており、私の研究もその流れに沿うものであった。

当時、最新の科学情報は、今のようにコンピューターを操作することで瞬時に手に入るのとは違い、発行後数ヶ月遅れでやっと届く外国雑誌に拠っていた。また、最近の情報を盛り込んだ広範な知見を得ようとする場合は、外国の教科書・専門書を手に入れるしかなかった。当時は、洋書を扱う本屋が定期的に研究室を訪れ注文をとっていく時代で、1ドル360円だったことに加え、定価に高額の郵送料、手数料が上乗せされてさらに高いものとなった。よって洋書は、院生にとって一大決心をしないと購入できないものであった。自分自身で初めて選んで購入した洋書は、『Dynamic Aspects of

Biochemistry』(Baldwin, 1967) と題する青い表紙の本だった。それを初めて手にした時の気持ちの高ぶりが今でも懐かしい。研究者になることを決心した証しでもあった。

大学院の修了を機に研究の幅を広げようと留学を決意した。自分の研究に行き詰まりを感じていたからである。幸い、オランダのワーゲニンゲンの植物生理中央研究所が博士研究員として迎えてくれることになった。オランダに渡り、街の本屋にいてみて驚いた。私の欲しい本が、信じられないような手頃な値段で並んでいた。滞りした街は小さいながらも、オランダ唯一の農科大学に加え国の農業研究機関のほとんどが集結しているという環境にあったため、店頭にはヨーロッパはもちろん、米国からの本も豊富にあった。うれしくて多くの本を購入した。おかげで留学期間中に植物科学の幅広い分野について多くを学ぶことができた。このときの経験が、私のその後の研究に対して広い視野と奥行きを与えてくれたと思っている。

学生諸君に伝えたい。“ここぞと思うときに集中して学ぶ!それはのちにきつと大きな力となる”。

以下には、私の担当している講義に関連した本を紹介する。



■ 葛西 奈津子 著

植物が地球をかえた！

植物まるかじり叢書①、(株)化学同人、2007年

わたし達をはじめとする動物は、“植物”によって生かされている。しかし、わたし達は、生き物としての植物をどれだけ理解しているだろうか？

「植物まるかじり叢書」は、生きものとしての植物の営みを最新の知見を交えて紹介するとともに、こ

うした植物を研究している人たちがどんなことを考えているのかを合わせて紹介しようと日本の植物生理学会が中心となって企画した全5巻のシリーズものである。高校生、大学1・2年生、一般向けとしながらも学問的な内容は植物科学の第一線の息吹が感じられる本を目指し書かれている。

その第一巻が本書で、植物の大切な働きの一つ、光合成を中心にまとめたものである。植物の行っている光合成はわたし達の食糧だけでなく、地球環境の形成や維持にも大きく関わっている。

サイエンスライターである葛西奈津子氏が、8人の光合成に関わる研究者にインタビューして、それぞれの内容を章ごとにまとめている。著者が内容を分かりやすく紹介しているとともに、それぞれの研究者の研究に対する考え方や取り組む姿勢が丁寧に紹介されていてそれだけでも興味深い本となっている。光合成の営みやその研究の面白さを知るのに格好の本である。



■ 丸山 茂徳／磯崎 行雄 著

生命と地球の歴史

岩波新書、1998年

地球の歴史は46億年、生命の歴史は40億年に及ぶ。この間、生命はいかなる進化を遂げ、地球はどのように変動し、それら進化と変動の要因はどうか説明されるだろうか？ 本書は、このような疑問に真っ直ぐに答えてくれる。「生命の進化史」を著者ら

独自の「固体地球の進歩史」という大きな視点からとらえ解説している。

主な内容は、地球と生命の歴史の中の七大事件、地球の変動原理、生命の誕生から原核生物までの初期生命の歴史、酸素発生型光合成の開始から5.5億年前の硬骨格生物出現までの生命発展の歴史、生物の大量絶滅と新種の出現が繰り返された5.5億年前から今日までの歴史、大気・海洋・地殻の歴史、地球のテクトニクス、マントルと核の歴史、そして生命と地球の共進化についてである。

本書を読むと、地球の表層環境とそこに生きる生命体がその歴史を通して固体地球あるいは宇宙の変動にいかに大きく左右されてきたかがひしひしと伝わってくる。東日本大震災を経験した直後故に、そのインパクトは強烈である。わたし達の自然に対する向き合い方を深く考えさせてくれる内容で、皆に読んでもらいたい本である。



園池 公毅 著

光合成とはなにか —生命システムを支える力—

ブルーバックスB-1612、講談社、2008年

「光合成」と言えば「植物が光によって葉でデンプンをつくる反応」と小学校で習って以来、誰もが知っている。しかし、一步踏み込んで「光合成のしくみは？」と正面きって問われると、多くのヒトが答えるのが怪しくなってしまう。

地球環境の保全、食糧問題、エネルギー問題等が日常的に話題となる時勢である。これらの問題に「光合成」が深く関わりとなれば、さらにその理解を深めておくことが現代人にとって必要なことであろう。

「光合成」を解説する本はいくつかあるが、そのほとんどは複数の著者によって書かれたものである。そのたぐいの本は、個々の項目の理解にはよいが項目間の関連を掴みにくいの欠点である。光合成を全体的・網羅的に理解するのに手頃な本が案外少ない。

そんな中で、文庫本サイズに「光合成」の重要な項目をバランスよくまとめ、読みやすい文体で一人の著者により書かれているのが本書である。全体を通して一貫した見方・考え方で説明されていて、入り組んだ生理反応の相互関係も理解しやすい。内容には最近の情報まで組み込まれており、光合成のほぼ全分野を網羅している。「光合成の全体像」をつかむのには適した本として推奨したい。



東京大学光合成教育研究会 編

光合成の科学

東京大学出版会、2007年

理系ばかりでなく文系の学生や社会人にも興味を持って読んでもらえるように、との編集方針のもとにつくられた「光合成」の解説書である。また、関連事項についてちょっと調べたい時などに便利な本でもある。

これまでの教科書は、光合成のメカニズムの解説を中心としたものが多かったが、本書は、そればかりではなく、近年のゲノム研究や遺伝子操作による新しい展開、環境や生態における光合成の意義、食糧との関わり、地球の歴史の中で光合成が果たしてきた役割など、光合成が生命科学・地球科学・社会に与える意義等についても幅広く解説している。

内容は、1. 光合成について考えてみよう、2. 生命世界は光合成が作り上げた、3. 多様な光合成生物の姿、4. 光合成を支える細胞構造、5. 光りをとらえて利用するしくみ、6. 光合成膜で起きるはじめの反応、7. 植物の体を作るための物質同化反応、8. 光合成を助けるしくみ、9. 葉緑体を機能させるための遺伝子、10. 葉緑体をつくり増やすしくみ、11. 環境に適応するしくみ、12. 光合成生物の進化とゲノム科学、13. 光合成は生命世界を作り続けるとなっている。

幅広く光合成を学びたい人にお薦めの本である。



デービッド・アッテンボロー 著

植物の私生活

門田 祐一 監訳、手塚 勲/小堀 民恵 訳、山と溪谷社、1998年

自然をテーマにしたドキュメンタリーの第一人者として知られるデービッド・アッテンボローが、植物たちの秘密と謎に満ちた驚きの生活を、多くの美しい写真に分かり易い説明文を添えて、世に送り出した名著である。

熱帯雨林、砂漠そして極地等で暮らす植物のさまざまな生き方を3年の月日を費やし追跡している。写真を見ただけでもわたし達の知らない植物のたくましさ、強さ、そのしたたかな生存戦略を知ることができる。

全体は6章からなり、第1章では植物が子孫を増やし縄張りを拡大していく戦略、第2章では養分の多様な調達方法、第3章では花粉輸送の作戦、第4章では環境変化の中での生き残り戦略、第5章では植物とさまざまな生物とのパートナーシップ（共生）、そして第6章では南極、北極、高山、砂漠等の極限の世界でのサバイバル戦略が紹介されている。

本書を読むと、太古からの様々な試練を乗り越えて適応・進化し今日まで命をつないできた植物のすごさが伝わってくる。植物に対するわたし達の一般的なイメージを大きく変えさせる内容と迫力をあわせ持った本である。一息入れたいときに手にとるにふさわしい楽しい本でもある。



L・T・エヴァンス 著

100億人への食糧

—人口増加と食糧生産の知恵—

日向 康吉 訳、学会出版センター、2006年

世界人口は、2011年11月に70億人を突破した。そしてその増加は今後も続き、2050年には100億人に達するとも予想されている。

はたしてこの地球は、増え続ける世界人口を将来も養うことができるのだろうか？予想される食糧危機

は、環境、生物多様性、教育、政治、経済等多くの問題と関わっており、世界が知恵を寄せ合って解決しなければならない問題である。

本書は、農学者として世界によく知られるロイド・エヴァンスによるもので、1-10章では、人類の出現から今日までの世界人口の変遷と作物生産に関わる技術、科学の発展、食糧供給の関係を、時代を追って説明している。11章では、現在世界では何を食べているのか、そして著者の強い思いが込められた最終章では、100億人への食糧供給への具体的な戦略の提示とその実現に際しての問題点が述べられている。

古今東西の人文科学から自然科学、社会科学と幅広い分野の膨大な情報をもとに、多様な観点からの論議が展開されている。その圧倒的な知識には驚嘆させられる。世界の農業史、農業技術史としても興味深い内容である。

乱読の履歴 — そしてこれからの推薦本 —



工藤 昭彦 KUDO, Akihiko

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院農学研究科)、農学博士

専門分野: 農業経済学

研究テーマ

基礎ゼミ: 『農』的世界の可能性ーポスト工業化社会の課題ー/『現代世界の『食』ー飽食と飢餓の構造』

基幹科目: 『資本主義と農業ー世界恐慌・ファシズム体制・農業問題ー』

総合科目: 『時代の文脈からみた『食』と『農』』/『環境と経済社会の調和に関する多様なアプローチ』

研究室: 教養教育院プレハブ棟2階 研究室8 E-mail: akihiko@bios.tohoku.ac.jp

読書は嫌いな方ではなかった。かと云って、年輪を語るほどの記憶はない。系統立てて読むというよりは、乱読であった。中学時代は何と言ってもヘルマンヘッセ。確か夏衣裳の少女のことを謳った詩の一節を、奥座敷の縁側で語っていたものだ。けたたましいセミの鳴き声を聞くと、今でもかげろうのような光景が時折甦る。青春であった。

往復4時間以上の高校通いが始まると、冬など真つ暗なうちに家を出た。ある日、担任の先生から「図書館の貸出は君が一番多いね」と云われたことがある。相変わらず乱読が続いていた。後で分かったが、先生は密かに小説を書いていたようだ。

この頃は対人恐怖症に悩んでいたこともあり、読書の記憶も楽しい思い出もあまりない。強いて言えば、太宰の『斜陽』ぐらいか。元華族の落ちぶれていく様が、明治生まれの気丈夫な祖母から聞かされた我が家の歴史と重なって、妙に生々しかった。ただ、太宰は最後まで好きにならなかった。

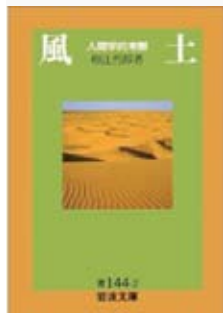
入学の儀式が終わり、米軍が置き去りにした蒲鉾校舎が残る川内で始まった教育部暮らしは、気怠かった。4年間続ける羽目になった乗馬部も、ある先輩の強引な客引きに逆らう勇気が無かっただけで、自ら入部を決断した訳ではない。不思議なことに自分から止めようとは思わなかった。

馬が取り結ぶ人間集団の生態は、書物の世界とは違うリアリティがあった。同じ釜の飯を喰ううちに、いつの間にか対人恐怖症からも解放されていた。『風とともに去りぬ』など超娯楽本は別として、それまでの乱読は、しばし眠りについた。

目覚まし時計のベルを激しくかき鳴らしたのは、全国に吹き乱れる学園紛争の嵐であった。皆が脅迫観念に取り憑かれたように活字を貪り、激論を戦わした。マルクスの資本論、ヘーゲルの大論理学、精神現象学などが突如として必読書になったのだからたまらない。読まない与会話についていけない気がした。考えてみれば、意味不明の乱読であった。

ただ、もう一度じっくり読んでみたいのは、マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』。白水社から山内義雄訳の5巻本が出ていて、これだけはまだ手元に残っている。第一次世界大戦前後の戦争と革命の嵐が吹き荒れるヨーロッパを舞台に、フランス生まれの主人公ジャックと彼を取り巻く人々の生き様を描いた壮大な歴史ドラマだ。

次ページからは、私の講義や基礎ゼミに関連して、これを読んでもらおうと嬉しいと思う本を6冊ほど紹介した。中には絶版本もあるが、図書館には数冊あるし、ネットで古本もまだ手に入る。参考にして欲しい。



■ 和辻 哲郎 著

風土 一人間学的考察—

1935年、岩波文庫、1979年

本書が刊行されたのは、戦前の1935年。間もなく80年近くにならんとするのに、新たな読者を獲得しながら読み継がれている。環境の世紀を迎え、改めて人間と自然の折り合いのつけ方が問われているからだろう。1991年に若干体裁を整えて再発

行された本書は、2009年に5刷りが出るほど静かなブームを呼んでいる。

たやすく読める本ではない。ハイデッカーの『有と時間』を批判的に継承し、人間存在の構造を時間と空間が織りなす風土としてとらえる哲学の書でもあるからだ。

特殊な風土は人間存在の特殊な構造でもある。こうした視点から著者は、モンスーンアジアは「受容的・忍従的」、砂漠地域は「^{まきば}实际的・意志的」、牧場的ヨーロッパは「^{まきば}理性的・合理的」といった人間類型の特質を鮮やかに浮き彫りにしてみせた。しばしば誤解されるように、風土が人間類型を規定しているという意味ではない。人間類型もまた風土なのだ。

従って、風土にしる人間類型にしる、共に変わり得ると考えていいだろう。グローバル化の嵐が吹き荒れる中、風土を支えてきた屋台骨も激しくぐらついているからだ。どんな風土創りを目指すのか。まずは本書を手にして格闘してみたい。



■ 大内 力 著

農業の基本価値

創森社、1990年

農業問題はかつて農民や農村の絶望的な貧困問題であった。大内氏は処女作『日本資本主義の農業問題』（日本評論社、1948年、毎日出版文化賞受賞）以来、90才で逝去されるまで、積み上げれば身の丈の2倍にも及ぶほどの著書を世に出したという。

緻密な論理が持ち味の氏の業績の中で、異色を放っているのが本書である。「食糧の安定的供給」、「自然環境の保全」など農業が有する四つの基本的価値について力説し、農業壊滅路線の選択は日本を「無農国」にするばかりか、「無能国」にすると警告している。農業の環境保全機能を重視することは、地球環境保全との関連でも注視されるべきだともいっている。

グローバル化の嵐に身を委ね、ただ単に自由貿易とりわけ農産物など一次産品の貿易を拡大していくことは、輸出国にとっても輸入国にとっても破壊的意味を持つという指摘など、自由貿易の一方的な拡大を目指す TPP（環太平洋経済協定）への参加がマスコミを賑わしている時だけに、改めて注目されてよい。

第一級の経済学者が珍しく情念を交えながら発した警告は、出版から20年以上経ったいまなお、鮮度が失われていない。



ジョセフ・E・スティグリッツ 著

世界を不幸にしたグローバリズムの正体

鈴木 主悦 訳、徳間書店、2002年

反グローバリズムの本だと思われがちだが、そうではない。原題は「Globalization and Its Discontents」。グローバリゼーションそのものというよりは、それを推進してきたIMF、世界銀行、WTOなど国際機関側に問題があるというのが著

者の立場だ。規制緩和、自由貿易こそ全ての人々の利益になるという信仰にも似た硬直的な思考パターンが、アジア通貨危機への対応のまずさなど、多くの災いを招いてきたからだという。

ビル・クリントン大統領の経済諮問委員会委員長、世界銀行のチーフエコノミストなどを歴任してきただけに、分析はリアルで分かり易い。著者が目指すのは「人間の顔をしたグローバリゼーション」へのチャレンジ。途上国の人びと、破壊が進む自然環境や農業など、疎外されがちな領域に対する眼差は優しい。

もともと著者は「情報の非対称性理論」で2001年にノーベル経済学賞を受賞した数理経済学者。そういう著者をして、数式を一切使わない本書を書かせしめたのは、独立したばかりのケニアでの大学教員経験や世界銀行時代のアジア通貨危機だろう。海図なき航海の時代、本書には羅針盤となるような指摘が随所に^{ちりば}められている。



ナオミ・クライン 著

ショック・ドクトリン (上・下) 一惨事便乗型資本主義の正体を暴くー

幾島 幸子/村上 由見子 訳、岩波書店、2011年

3. 11の大災害に見舞われた東北そして日本にとって、本書に込められた警告は他人事ではない。社会を危機に陥れる壊滅的な出来事を利用して巨万の富を得る「惨事便乗型資本主義」の生々しい実態が、臨場感溢れる筆致で綴られているからだ。

著者クラインは、上下2巻、700ページを超える力作で、精力的取材活動や膨大な文献考証によりながら、1970年代のチリの軍事クーデターから9. 11のアメリカ社会やイラク戦争など、広範な現代史の出来事を分析の俎上に乗せている。そこで暴かれるのは、自由と民主主義という美名のもとに推進された急進的自由市場改革・規制緩和が、大企業や多国籍企業、マネーゲームに踊る投資家の利害と密接に結び付いたものであり、貧富の格差拡大やテロ攻撃を含む社会的緊張を増大させたという「不都合な真実」だ。

時に凄惨な暴力をも辞さない一連の社会実験の原点は、電気ショックや感覚遮断など過剰な「身体ショック」で人の脳を「白紙状態」に戻す「人体実験」にあるというから、おぞましい。本書の警告は、「巨大地震」、「大津波」、「原発事故」という未曾有のトリプルショックで「白紙状態」を強いられている被災地にとっても、決して例外ではないはずだ。危機の時代を見抜く好著であり、一読を勧めたい。



■ 平野 克己 著

経済大陸アフリカ —資源、食糧問題から開発政策まで—

中公新書、2013年

『経済大陸アフリカ』という書籍のタイトルに違和感を覚える人も多いのではないか。アフリカといえば貧困と飢餓に喘ぐ辺境の地というイメージが強いからだ。本書が注視する急速な経済成長は、こうしたアフリカの固定観念を一掃する。成長の牽引役は

中国。その証拠に石油など豊富な天然資源を求めてやみくもにアフリカに攻勢をかけ、各国でのプレゼンスを増している。いまやアフリカの輸出入ともに、圧倒的にトップの座を占めているのは中国だ。

信じ難いことにアフリカの賃金は中国より高い。このため進出した中国企業にとって安価で使い勝手がいいのは本国から連れてくる労働力。経済が成長しても現地の雇用が増えないのはそのためだ。このままだと資源も雇用も中国に奪われてしまいかねない。

著者によれば、アフリカの賃金が高いのは輸入依存度を高める食糧価格の上昇で都市の生活コストが上がったためだ。背景にあるのは国内農業の低迷。だからこそジニ係数が著しく高いアフリカが格差を圧縮し、世界の食料安全保障を脅かす震源地とならないためにも、農業革新に的を絞った内外の投資が必要だと力説する。

割愛した開発援助や企業行動分析を含めて、全編が豊富なデータに裏打ちされているだけに説得力がある。



■ 加藤 尚武 著

新・環境倫理学のすすめ

丸善ライブラリー373、丸善出版、2005年

人間の行動規範を論じる学問という意味で、環境倫理学も古来からの倫理学の範疇に入る。それが独自の学問領域として広く市民権を得るようになったのは、環境問題が深刻化したからだろう。1972年の「国連人間環境会議」(ストックホルム会議) 前後から、

欧米で環境倫理学という言葉が使われるようになった。92年の「環境と開発に関する国連環境会議」(リオ・サミット) 以降、環境倫理学は扱う対象や内容を拡大しながら世界に広まった。

いまや「エコしよう」、「エコしている」といった軽いノリで語られるほど、環境倫理学は身近なものとなった。功績の一端を担ったのは、加藤氏が20年前に出版した『環境倫理学のすすめ』だろう。その続編にあたるのが本書だ。

前書は京都議定書のような国際協力体制が生まれることを期待しながら書いたという。今度の本書には、同議定書が誕生と同時に傷だらけになる中、学生諸君のような若い世代への著者の願いや期待が込められている。終章で、「戦争による環境破壊」を警告しているのも、本書ならではだ。

「世界の有限性」、「世代間倫理」、「生物種の生存権」など環境倫理学の三原則は、20年前から少しもぶれていない。

学問とは何か？ — 大学は何を目指すべきか —



森田 康夫 MORITA, Yasuo

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院理学研究科)、理学博士
専門分野: 数学(整数論)、数学教育(少子化が教育に与える影響の研究)、入学試験
基礎ゼミ: 「学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える」
基幹科目: 「科学と情報: 数学と人間 - 数学を俯瞰する」
総合科目: 「教育と科学技術」

研究室: 教養教育院プレハブ棟2階 研究室2 E-mail: ysmorita@m.tohoku.ac.jp

私は第二次世界大戦が終わった1945年に生まれ、高度成長期の1970年に数学の研究者として出発し、整数論の色々な分野で研究をしてきた。しかし東北大学の教授として入学試験と交通問題を担当することになり、数学教育や入学試験のことも研究するようになった。このため、それまでは新しい数学の定理を探すことに私は熱中していたが、現実世界の中で入学試験や教育をどのようにして改善するかを考える様になり、真理を知りたいという「思い」重視から、どの様な結果となったかという「結果」重視に価値観を変えた。

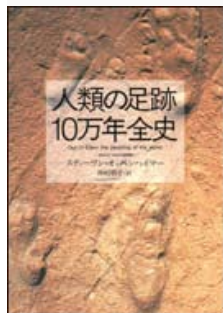
私は教育の任務は若者の能力を開花させ、有能な人材として社会に送り出すことにありと考えている。教育は人材育成を行うサービス産業であり、お客様である生徒や学生の幸せと、社会発展の基盤となる有能な人材を育成するため、できる限りの努力をすべきものと私は考えている。しかし、日本社会では少子化の中で大学の学生定員が増加しており、今まで若者を学習させる主たる動機であった入学試験に受かることが容易になり、誰でもどこかの大学に入学できるという「大学全入」が実現している。そのため、ゆとり教育の影響もあり、今までより少ない知識と能力を持った若者が大学に入学している。私は数学という結果が見やすい教科を担

当していたため、日本がこの様な状態になることを15年余りに気づき、友人達と共に入学試験や数学教育の改善のために努力を続けてきた。

私達や私達の直ぐ下の団塊の世代は戦後の貧しさを憶えており、生きるために必死になり働いてきた。その結果、1980年頃には日本は欧米に追いつき、「Japan as No.1」とまで言われる様になった。しかし日本人は慢心し、バブルを起こし、さらにその処理にも失敗し、現在に至っている。

私は、今日本は分かれ道に面していると思っている。そのため、「日本人はこれからの世界でどのようなことを目指すべきか?」を考えることが必要であると考えており、大学人は、「学問とは何か?」、「日本の大学は何を目指すべきか?」について再考すべきだと思っている。

私は入学試験、数学史、および科学技術をテーマとした授業を行っており、授業を行いながら以上のようなことを考えている。以下でお薦めする本は、この様な視点から選ばれたものである。



■ スティーヴン・オッペンハイマー 著

人類の足跡10万年全史

仲村 明子 訳、草思社、2007年

人類は約700万年前にアフリカで類人猿から誕生し、その後ユーラシア大陸に広がった。私達ホモ・サピエンスがどのようにして古いタイプの人類（旧人）から進化したかについては、アフリカで進化して全世界に広がったという説と、世界各地で進化し

たという二つの説があり、長年議論になってきた。しかし、最近ミトコンドリアの持つ DNA などを使って過去を解析する方法が発達し、ホモ・サピエンスはアフリカで進化したとの説が有力となっている。

この本では、現代人が持つミトコンドリアや Y 染色体の DNA に基づき人類史を詳しく分析し、ホモ・サピエンスは旧人から十数万年前にアフリカで進化し、氷河期による海水の低下に助けられ、約10万年前に（スエズ地峡ではなく）紅海の南端からアラビア半島へ渡り、さらに海沿いにアジア大陸に渡り、約8万年位前に東南アジアを介して東アジアとオーストラリアへ、約5万年位前に中東を介してヨーロッパに、さらにベーリング海峡を経て約2万年前にアメリカ大陸に広がったと主張している。

最近の生命科学の発展や人類の起源などに興味を持つ人に勧めたい本である。



■ E・T・ベル著

数学をつくった人びと I、II、III

田中 勇／銀林 浩 訳、ハヤカワ文庫、2003年

数学は古代文明と共に誕生し、古代ギリシャにおいて数学の学問としての体系ができた。その後、ギリシャの数学はインド・アラビアを介してルネッサンス期のヨーロッパに伝わり、デカルトやニュートンの研究により、「科学を語る言葉」としての数学の地

位が確定した。この本では、このような歴史を数学者の逸話を紹介しながら記述している。

この本は1937年に初版が出た数学史の古典であり、日本語訳は1997年に出版され、2003年に文庫版が出版された。この本が書かれた当時には20世紀の数学の評価が確定していなかったため、20世紀の数学については余り書かれていない。

この本のIでは古代から18世紀までの数学を紹介し、IIでは19世紀前半の数学を紹介し、IIIでは19世紀前半から20世紀初めまでの数学を紹介している。

この本について、森毅氏は「微分積分学が何をしたくて考え出されたかわかったら、微積分発明の裏にニュートンとライプニッツのどろどろした先取権争いがあったと言ったら、俄然興味がわいてきませんか?」と言っている。

科学や伝記に興味を持つ人に勧めたい本である。



■ マーカス・デュ・ソートイ 著

素数の音楽

富永 星 訳、新潮文庫、2013年(2005年)

オイラー(1707年-1783年) は

$$\zeta(s) = 1 + 2^{-s} + 3^{-s} + 4^{-s} + 5^{-s} + \dots + n^{-s} + \dots$$

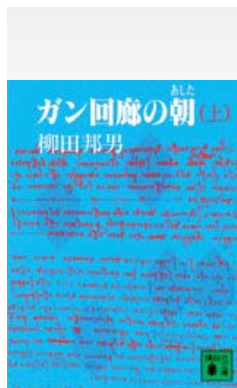
で定義される関数(ζ関数と呼ぶ)を考え、「自然数は素数の積として表せる」という定理が、

$$\zeta(s) = \prod_p (1 - p^{-s})^{-1} \quad (p \text{ は素数全体を動く})$$

という等式で表現できることを発見した。その約1世紀後にリーマンは $\zeta(s)$ を複素変数の関数として研究したが、その時発見された「 $\zeta(s)=0$ となる複素数 s は、負の整数でなければ、実部が $1/2$ である」というリーマンの予想が本書のテーマである。

この本は、オックスフォード大学の数学の教授で、科学関係の記事を多数書いているソートイ氏が、リーマン予想を中心とする素数研究の現状について書いたものである。数式をほとんど使わないで書きながら、整数論が専門の私の目から見ても、非常に正確に数学的内容を伝えている。

この本は、オイラー、リーマン、ゲーデルなどの数学者の人間的な魅力を、素数というテーマに沿いながら紹介している。これから数学を専門として学習しようとする人、趣味として数学に興味を持っている人、数学とはどのような学問であるかを知りたい人などにお勧めしたい本である。



■ 柳田 邦男 著

ガン回廊の朝 (あした) (上・下)

講談社文庫、1981年

柳田邦男氏はノン・フィクション作家であり、医療や航空などを専門分野としている。本書は、昭和37年に設置された国立がんセンターの開設当初のガン克服を目指した戦いを描いた名著である。

ガン医療は急速に進展しており、最近は完治する

人が増えている。しかし、当時は5年生存率も低く、初代のがんセンター総長がガンにかかったときには、本人にガンであることを告知しなかった。このように、この本で書かれていることと現在のガン治療とはかなり異なっている。しかし新しい知見を得て科学を進歩させる努力はいつの時代でも同じであり、この本には高度成長期に日本人がガン撲滅という夢に向かって戦いを始めた時代の熱気が描かれている。

この本は読み物としても面白いが、柳田氏は徹底した取材に基づき客観的に書いており、この本を読むことにより、研究成果を出すとはどういうことか、現実を改善するとはどういうことかを知ることができる。私達が「少子高齢化と財政危機に直面した日本を、これからどう立て直して行くか」を考える際の参考としても、この本は役立つものと思われる。



石巻赤十字病院 著、由井 りょう子 文

石巻赤十字病院の100日間

—東日本大震災 医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録—
小学館、2011年

石巻市では東北地方太平洋沖地震による大津波により約4000人が命を落とし、多くの人が家屋をなくした。石巻赤十字病院は、石巻の病院のなかで唯一津波の被害を逃れ、震災直後の医療の中心となった。この本はそのときの同病院の活動を記録

したものである。

石巻赤十字病院では被災者の医療の必要性を定めるトリアージを行い、限られた医療資源を効率的に配分し、地域内のすべての避難所の状況を巡回調査し衛生環境の確保につとめ、外部の機関と連携することにより必要な物資を確保し、多くの被災者の命を救った。

本書を読むことにより、災害医療とは何かを知ることができる。また、本書は単なる読み物としても面白く、付属の看護専門学校が津波に襲われ、避難した学生が被災者の医療につくす様子や、逃げ遅れて津波に流された人が病院に運ばれ低体温症や肺炎の治療を受ける様子などが、緊迫感を持って伝わってくる。

日本人は東日本大震災に際し冷静さを失わず、協力して犠牲者の数を抑え世界の賞賛を受けたが、本書によりそのことが確認できる。



佐野 眞一 著

津波と原発

講談社、2011年

佐野眞一氏はノンフィクション作家として定評のある人だが、東日本大震災直後の3月18日から津波で被災した地域の取材を始めた。

佐野氏が訪れた宮城県南三陸町では、志津川病院の建物の4階部分までが津波に襲われ、屋上まで

逃げられなかった患者は津波にのみ込まれた。陸前高田市では3000戸以上が全壊し、2000人近くが死亡または行方不明となった。宮古市田老町では、高さ10メートルの防潮堤を作って津波に備えていたが、津波は防潮堤を乗り越え住民を襲った。佐野氏はこれらの町の被災状況を生々しく描写している。

また、佐野氏は4月後半に原発事故で立ち入り禁止となっている楢葉町、富岡町、浪江町などを訪れ、死の町となった現地の状態を描写し、なぜ東北電力の事業範囲である福島県双葉郡に東京電力福島第一原子力発電所が作られたのかを説明している。本書を読むことにより、福島第一原発が作られ深刻な事故を引き起こした社会的背景を知ることができる。

本書は、「津波と原発」について非常に良く書かれた本である。

本との出会い ― 今、君たちだったら ―



海老澤 丕道 EBISAWA, Hiromichi

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院情報科学研究科)、理学博士

専門分野:理論物理学(超伝導／超流動、ナノ物理学)、ゆらぎ科学

基礎ゼミ:「創造的な研究とは―ノーベル物理学賞に学ぶ」

展開ゼミ:「創造的な科学研究と人間社会」

基幹科目:「自然界の構造:おはなし物理学」

総合科目:「科学と人間」

研究室:教養教育院プレハブ棟2階 研究室7 Email: ebi@m.tohoku.ac.jp

高校生時代までに学校で得る知識はたいがい、皆一緒に同じことを同じところまで教わって得るものだ。入学試験問題をなるべく正しく解くために役立つ学力が身につくであろうが、それは結果を教わることが主であり、学問とは言えない。皆が同じことを教わるからではなく、結果を教わるからだ。大学での学びは記憶に取り込んだ広い知識ばかりではなく、身についた力が目標でなくてはならない。それも、既存の問題が解ける力ではない。私はそんなことを考えて、担当する授業科目の内容をより良くする努力を続けてきた。

およそ半世紀前、諸君と同じように大学生としての一歩を踏み出した。1年半ほど考えた末、私は物理学者になる道をたどり始めた。その頃は物理学科自体が小さな学科で家族的であり、好きな分野と限らずに皆で専門書を一緒に勉強し、専門外の本を輪読する学部学生生活だった。その時代、つまり進路を決めるまでと研究生生活が本格化するまでの過程で、それまで子供時代から読んできた本とは別の種類の本に知識を求めた。高校生時代までは文学書が主だったし、子供の時は子供向けの科学書も多く読んでいたのだった。

私の「読書の年輪」はその学生時代のところの刻みが厚い。論文を読むことに追われる前のことで

ある。読んだ本はその後の研究に役立ったというよりも研究をする私の心を作った本といえる。そう長い時間を読書に使う余裕もなかったので、多くは新書や文庫本であった。分厚いような本は題目に惹かれて買っても読み通せなかったように思う。

教養教育院に所属して教養教育科目を担当することになって新たに授業内容を創ることになり、あの頃に読んだ本が半世紀の時空を超えて頭の中によみがえってきた。それらの本に気持ちを高められて、研究がどんな意味を持つかを課題にした「科学と人間」の授業の企画ができた。小学生から中学生の頃に愛読した一冊の科学啓蒙書に影響されて、数式になるべく頼らないで物理学を知り、身近な現象について考える力を養おうとする「自然界の構造:おはなし物理学」の授業内容が構想できた。

それらの科目の詳しい説明はさておき、それらを企画・構想する基となった本を紹介しよう。私が出会った本の一部である。物理学に偏っているが、物理学が学問の樹における幹の位置にあるのだから、として許していただきたい。手にとって読んでもらうと良いが、少なくとも参考になることをのぞんでいる。君たちがそれぞれ読みたい本、君たちを育ててくれる本と出会うことが願いである。



■ アインシュタイン／インフェルト 著
物理学はいかに創られたか (上・下)
 石原 純 訳、岩波新書、上1939年、下1940年

二十世紀に活躍した世界最有名人で相対性理論を打ち立てた人として知られるアインシュタインは理論物理学者の中でも代表的な存在だ。自然現象を相手に人間の心が物理学という「物語」をどのようにつくり上げようとしてきたか、evolution (発展、

進化) として語っている。数式を使わないで「たとえ」で説明し、要所に図・写真を使った丁寧かつ明快な記述である。

まず、ニュートンの力学とファラデーとマックスウェルによる電磁気学の歴史を「力学的世界観の『勃興』と『凋落』」として語り、物理学としての内容を説明し、自然科学とは人間のいかなる活動であるかを教えてくれている。次いで相対性理論・量子論を詳しく説いている。アインシュタインはボーアらの波動関数の「確率解釈」を認めなかった人だが、そこはインフェルトがしっかり書いてくれた。

訳者の石原純 (元東北大学教授) はアララギ派歌人でもありきれいな日本語で書かれている。初版以来70年そのまま発行され続けた文面はいくらか古めかしいが、視覚的にはほとんど文字ばかりであるがそれだけに、内容がぎっしり詰まっている。文系理系を問わずに思考力と知的好奇心を備えた学生なら読み進められる名著である。



■ ポアンカレ 著
科学と仮説
 河野 伊三郎 訳、岩波文庫、和訳初版1938年 (原書1902年)

クラスメート達のおかげでこの本に出会った。量子論・電磁気学など専門基礎科目を学ぶのに忙しかった頃、泊まりがけの読書会の提案があり、かなりの人が参加した。伊豆にあった大学の施設だった、楽しい集まりだった。読んだ本がこれである。

ポアンカレは数学者だが理論物理学者・天文学者としても功績を残している。論文だけでなく著書の数も膨大である。科学思想については、この本が彼が書いた最初のものであり、最も有名である。

私達が直接に興味を持ったのは第九章「物理学における仮説」であったのだと思う。物理学は実験によって真実を知る学問である。だが、それなら数理物理学の役割は何なのか。ここで、事実の集積が科学ではない、それは石を積み上げて家にはならないのと同じだ、という。良い実験は一般化を許す、これにより充実してゆく科学を蔵書が絶えず増大する図書館にたとえると目録を調整する役割を果たすのが数理物理学だ、という。一般化はそれぞれが仮説であり、物理学ではそれは多く数学的形式をとる。こう始めて、科学がどう発展してきたか、どうあるべきかを豊富な例をあげて教えてくれる。科学を学ぶ人にも哲学を学ぶ人にも優れた古典である。



寺田 寅彦 著／小宮 豊隆 編

寺田寅彦随筆集【全5冊】

岩波文庫、1・2:1993年(1947年)、3・4:1983年(1948年)、5:1986年(1948年)

寺田寅彦という物理学者は夏目漱石の『三四郎』に登場する野々宮さんのモデルとして、また「天災は忘れた頃に来る」という防災の警句で知られ、随筆家で俳人でもある。

寺田の研究には、まだX線が粒子線か電磁波か

が不明だったとき、鉱石の結晶による波としての回折の実験を行ったものがある。実験を成功させNature 誌に発表した。しかし、ブラッグ父子がほんの少し先んじて研究していたことを知って寺田はこの研究を止め、全く別の方向に研究を変えた。「人まね嫌い」だったそうである。ブラッグ父子はノーベル賞を受賞し、寺田は学士院恩賜賞を受けた。

随筆集『備忘録』中の「線香花火」には花火の説明に加えて、日本固有の線香花火が次々に枝分かれする現象を日本人の手で解明したい、西洋の学者の掘り散らかした後へ鉱石のかけらを探しに行くもよいが足下に埋もれている宝をも忘れてはならない、と書いている。この『備忘録』は第2巻に収録されているが、文庫には第1巻から第5巻まであり、科学を対象にしたものに限らず文学味豊かな多くの随筆が集められている。すべての分野の学生諸君に勧めたい。身近なことを観察しながら本質を洞察する寺田寅彦の精神を学び、楽しんでほしい。



湯川 秀樹 著

目に見えないもの

講談社学術文庫、1976年

日本人の心が敗戦直後沈んでいた時代に、湯川秀樹が日本人として初のノーベル賞を受賞するというニュースは人々に元気を与えた。多くの若者が物理学の研究を目指すことになった。私もその一人である。しかし、湯川が多くの本を読んでいる教養人であり、

格調高く深い内容をもつ学問論や現代の物理学の解説を多く書いていることには気づいていなかった。最近改めてこの古くてなお新しい本を読んでみた。

湯川の研究は理論物理学である。現代の理論物理学が何を研究し何をめざすのか、当時（1940年代まで）の状況を踏まえて述べたのが前半である。後半には自らの生い立ちや折々感じたことを振り返り、自然観、研究観、科学論等を述べた文章が集められている。私にとって印象深い箇所の一つは「科学と教養」の中で、ある自然科学書が単なる知識としてではなく真に一般人の教養に役立つか否かは、主として著者の心構えとか気魄とかがその内容を通じて感得せられるか否かだと書いているところである。もう一つは「目に見えないもの」の中で、黴菌の研究と医学をたとえにして、人々に原子や電子の研究に親しみをもつよう仕向ける必要性を示唆しているところである。今日の、人間生活と先端科学の精神的な乖離を予想していたかのようなのである。



ジェームズ・D・ワトソン 著

二重らせん —DNAの構造を発見した科学者の記録—

江上 不二夫／中村 桂子 訳、ブルーバックスB-1792、講談社、2012年

科学研究の現場の話は一般の人たちには小難しくなってしまう、面白くもないだろう。これは私が研究を始めた頃に抱いていたイメージであった。ところが、この本を読むと、研究がどんなに人間的であり、社会的であり、すごいドラマの展開であるか

を如実に感じることができる。

遺伝子の所在は細胞の核にある核酸、DNAの上であろうと分かり始めた時代に、DNAの物理的な構造模型を提唱したのが著者ワトソンとその共同研究者フランシス・クリックであった。その基となったX線回折の研究を行ったモーリス・ウィルキンスとともに1962年のノーベル生理学・医学賞を受けている。研究は1951年から1953年にかけて展開されたが、その経過の実に人間臭い記録が本書である。

私は博士課程の学生だった時に、原著が書かれた(1968年) 同年にタイムライフインターナショナル社から出版された同じ翻訳者達による「DNAの構造を発見した科学者の記録」と副題がついたものを読んだ。感動したと言うより、人間がすることの意味を妙に納得してしまったように思う。一方で、ワトソンの強烈な個性に対して違和感を覚えた気もする。



佐野 昌一 著

おはなし電気学

科学知識普及會(明治書院発売)、1939年(絶版)

こんな感じの本を今、知識欲盛んな子供達が食いつくように読み進むところを想像してみると本当に楽しい。電子の話から始まってざっと挙げると、静電気、電流、電磁気の話、発電の話、家庭内の電気の話、電車の話、電気機関車の話、電話の話、電

話交換機の話、放送の話、真空管の話、電波の話、落雷の話、映画の話、テレビジョンの話まで47話の構成である。縦書き、右めくりの、小説スタイルである。それもそのはず、著者は逓信省電気試験所研究員の技術者ながら海野十三(じゅうざ)のペンネームでSF小説や探偵小説を書いた作家でもある。著者自身手書きの挿絵も豊富であり、楽しめる。

序文にテレビジョン開発で知られる川原田政太郎元早大教授が、「快著」とであるとしてその平易さ、面白さ、かゆいところに手が届く様を賞賛している。アマチュアファンのみならず、学生、専門家もこれによって真の意味を初めて掴み得るところ多々ある。私は父の書架で見つけ、出版後10数年を経たこの本の虜になってしまい、小学生時代から電気が好きになった。今は内容的には古い部分がほとんどだが、この本を読み返すと科学技術の知識とはかくあるべきだということがよく分かる名著である。附属図書館に収蔵されている。

「大学時代でなくても、 できること」ではなく



柳父 圀近 YAGYU, Kunichika

総長特命教授(2009年度～2010年度、2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院法学研究科)、博士(法学)
専門分野:西洋政治思想史、マックス・ウェーバー研究

※2010年度

担当科目

基礎ゼミ:「文明論の概略を読む」/「福沢、岡倉、内村—西洋化と知識人」

基幹科目:「法・政治と社会:政治学入門」/「歴史と人間社会:職業観念から見る社会史」

総合科目:「西洋史と政治思想」

私は長らく西洋政治思想史を担当してきました。とくに近代西欧に生じた市民社会の特質と近代国家の関係を、またマックス・ウェーバーの学問と思想を研究テーマとしてきました。

川北でもその関連のテーマで授業をします。

それはそうと、皆さんはこれからの大学時代をどのように使おうと思っていますか?

大学で勉強するということは、「世界の多面性」を知り始めることではないかと私は思っています。皆さんも、世の中にはいろいろな考え方があって、いろいろな価値観を持った人たちがいるのだということに次第に目覚めるのではないかと思っています。大学で、異なる価値観からは、世界のあり方が、自分の見方とは違って見えて来るのに気がつくことは大切です。(世の中の多様な考え方に接するのは、社会人になってからではないか、と思うかもしれませんが、しかし社会人になると、案外その組織や業界の一つの考え方とか時代の空気などに染まってしまうものです。)

大学では、授業を通じて、それまでの自分の頭とは違った考え方や、物事の捉え方に会おうでしょう。いろいろな学説や本に出会います。また、身のいろいろな先生たち、友人たちとディスカッション

して、くり返し、「世界の見え方」の多面性に目覚めて行くことになるでしょう。しかも「いろいろな見方」を、「私利私欲」を離れて検討し、理性的・批判的に深く考察する訓練を体験するはずです。そしてそれこそは、大学生活ならではの、一種の「純粹経験」ではないかと私は思っています。そしてその中で先生や友人たちとの交流を深めてゆくことができれば、それも生涯の「財産」になるだろうと思います。

4年間はアツという間です。しかし上手に使えば実りの多い時間です。ですから何であれ、「大学でなくても」できることや、「大学を出てからこそ」できることに、学生時代を使うのは賢明ではないと思います。「大学でなければ」できないのは、たぶんこの知性の「純粹経験」でしょう。

大学には、さまざまな立場の研究者がいることが必要であり、学生は、多様な立場の学問に接し得る必要があるということです。または非いろいろな本や文献に接してほしいと思います。この後すこし本を紹介しておきますが、それはあくまで私の講義との関係で参考になるものを紹介するという限りのものです。

(2010年2月)



■ マックス・ウェーバー 著

職業としての政治

脇 圭平 訳、岩波文庫、1980年、原書1919年

古今の「政治の世界」に通じた著者の知識が惜しげもなく使われ、また「政治と人間」についての深い思索が語られている、まずは類例のない講演です。

もちろん時代の制約を受けています。しかしぜひ

読んで、いろいろ考えてみてください。

第一次大戦直後の混乱したミュンヘンで学生団体の求めに応じた講演ですが、今日でも大きな影響を、政治に関心のある人々(政治家だけではなく)に及ぼし続けています。

ひとつの行為がもたらし得る「意図せざる結果」をも、できるだけ予測して(その予測のためにこそ、社会科学は存在する)、そうした「意図せざる結果への責任」をも引き受けるのが、政治における倫理的態度(=「責任倫理」)だ。それは「動機の純粋性」に生きる「心情倫理」(信念倫理)の態度とは違ってくる、という議論を——他にもいろいろ「政治の世界」の特質を論じていますが——とくにじっくり読んでみてください。

変則的なアドヴァイスですが、この本に限っては、最後から読み始めて、前へ前へとさかのぼり、もう一度頭から読むのがよいかも知れません。



■ 大塚 久雄 著

社会科学における人間

岩波新書、1977年

この本はNHK 大学講座の講義をもとに書かれています。学生時代に読んでから今日まで多くの示唆を与えられて来ました。

社会科学はまず近代の西洋で、近代西洋人とその社会を自明の前提として形成されました。しかし

そのままでは近代西洋以外の時代や文化圏の諸社会について学問的に分析するには無理が生じます。例えば近代日本の人間と社会には、近代西洋の場合と重なる面もありますが、大きな違いもあります。西洋の場合と学問的に比較するにはどうすればよいでしょうか。もちろん共通する要素の分析は重要です。しかし、それぞれの社会の人々の社会的行為の「主観的動機の意味」をよく理解し、社会現象を、その動機を「原因」として生じるものとしても因果関係的に十分説明する必要があります。この場合、それぞれの社会の文化、特に宗教意識の影響は大きな意味を持ちえます。そうした宗教文化との関係で生じる「人間類型」ないし「エートス」に注目して社会科学の新たな方法を形成したのがマックス・ウェーバーでした。

大塚さんはウェーバーのこうした方法をマルクスの歴史理論との関係で考察しながら、独自の方法へと展開しています。



■ マックス・ウェーバー 著

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

大塚 久雄 訳、岩波文庫、1989年、原書1920年

現代社会科学の古典のひとつ。単なる「営利欲」や「投機」、また政治的特権に「寄生」する営業ではなく、ひたすら「合理的な隣人愛」実践としての職業活動にいそむことへと、当時の人々を強く動機づけたのが、プロテスタンティズムの職業観念

だったと分析しています。「社会」とはある意味では「職業」のネットワークです。プロテスタンティズムの「職業観念」は、封建時代の職分のネットワークたる「身分制社会」を一変させ、「市場」に媒介された「市民社会」を形成する社会の動きを加速させた。こういう分析です。

しかし歴史はここにとどまらず、同じプロテスタンティズムの「職業観念」は、意図せざる結果として、とどまることを知らない近代資本主義の進展にスイッチを入れました。その進展の先に生じる「人間疎外」の問題も、本書は鋭く論じており、現代の社会科学に大きな影響を与えています。

ところで、西欧とは違う文化伝統のもとにあった日本や東アジアの「近代化」の場合、こうした問題にあたるものは一体どうなっていたのでしょうか？

こうした問題関心にもいざなう本です。



■ 福田 歓一 著

近代の政治思想 —その現実的・理論的諸前提—

岩波新書、1970年

「デモクラシー」とか「国民国家」と云った政治制度や政治理論の多くのものは、ヨーロッパの歴史の中で形成されて来たものです。

もちろん、現代の世界では、ヨーロッパ文化圏の重みは相対化されていますし、また時代的にも

「近代」と「現代」では大きな変化が生じています。しかしそれだからと云って、政治について考えてみようという場合は、また積極的に政治学を学びたいという人は、西洋近代の政治学、政治思想の歴史を学ばないですますわけにはゆきません。中世や古代のヨーロッパ政治思想についても学んでおく必要があります。デモクラシーと云う言葉が、古代ギリシャに由来することは知っているのではないのでしょうか。

この本は、戦後の政治学と西洋政治思想史研究の発展に大きな役割を果たし、07年に亡くなった著者の、岩波市民講座の講演がもとになっています。学生時代に読んで政治思想史の扉が開かれた感のあった本の一つです。

なお、少し難しいかもしれませんが、同じ著者の、2009年刊行された論文集『デモクラシーと国民国家』(岩波現代文庫) も読んでみるとよいでしょう。



丸山 眞男 著

忠誠と反逆

一転形期日本の精神史的位相—

ちくま学芸文庫、1998年

著者は日本政治思想史の専門家です。戦国武士の心には「天道」への忠誠心と、「主君」への忠誠心との矛盾が宿っていたと分析しています。その矛盾の間に生きていたゆえに、武士は時には天道に反する主君をいさめ、その方法として「腹を切る」場

合もあったと言います。

今日でも、ひとは「普遍的な原理（道理）」と、「組織」の「特殊利害」との緊張関係の間に立たされることがあります。そのとき人は「自分はどうする?」という問いに目覚めます。その自問によって初めて、ひとは「個人」としての自分に目覚めるのです。ところが日本では明治後半以後の「発展」とともに、上述の意味での「個」の意識がむしろ失われてゆく傾向が見られると、著者は資料によって分析しています。

この傾向にそれぞれの思想で抵抗した人びとを論じた論文「福沢・岡倉・内村；西欧化と知識人」の鮮明な印象は忘れられません。また幕末と明治初期にはあったいろいろな政治的、思想的可能性を論じた論文「開国」も示唆に富みます。



萩原 延壽 著

書書周游

萩原 延壽集5、朝日新聞出版、2008年

萩原さんは本来歴史家ですが、政治、芸術、思想などさまざまな分野の本の書評を集めたものです。最初は、1972年に文芸春秋社から出た名著です。

ひとくちに「書評」と云いますが、他人の書いた

本を公平に、また深く理解して紹介し、そのうえで、しっかりした批評を書くのはなかなか難しいものです。今日でも世間には「その本がちょっと読めていない書評」や、「内輪ほめ」の類が少なくありません。しかしこの本は、しなやかな自己意識と、「他者のものの見方」を積極的に理解しようとする精神による、本当の「対話」が伝わってきます。これを読んで著者のその精神に「感染」することを薦めます。

この本で取り上げられているのは、20世紀の哲学者バーリンの名著『自由論』から、ナチズムとの困難な闘争を闘った名指揮者フルトヴェングラーの『書簡集』に至るまで、多岐にわたっています。ですからこの本は、社会と文化と歴史についてのすぐれた入門書でもあります。続編と云うべき『自由の精神』の巻も是非読むことを薦めておきます。

秋葉 征夫

AKIBA, Yukio

退職

学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌まじりの本… 出会った本



秋葉 征夫 AKIBA, Yukio

総長特命教授(2008年度～2010年度。2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院農学研究科)、農学博士
専門分野:動物栄養生化学、家禽学

※2010年度

基礎ゼミ:「食の比較生化学ーヒトと動物ー」/「ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝」

基幹科目:「生命と自然:鳥とニワトリの生物科学」

総合科目:「食から探る生物・生命・暮らしの科学」

担当科目

私が本を読み始めたと言える(意識している)のは高校時代だと思う。それは他の人たちに比べて断然遅く、自慢にはならない。高校時代は歴史小説を若干読んだ。吉川英治の文芸書『私本太平記』だったと思う。足利尊氏の波乱に満ちた生涯を活写したもので、この本を手にして以来、本を読むことの抵抗感が薄れたように記憶している。その後、東北大学に入り、クラブ(軟式テニス同好会)に入って、先輩からいろいろの書物を紹介され、そしてそれらの本の感想についての議論や好きな作品の文章の書き写しなどを経験し、やっと半人前の「本読む学生」になったと思っている。学生時代は背伸びしながらも、詩集や哲学系の本にも手を伸ばし、結果的に人文系の知識も少しは得ることができた。

研究生生活(本学農学部)に入ってから、農学や栄養学の専門書や専門関連の書籍を読むことで手一杯になってしまった時期が多い。さらに昨今は、時折に読む一般書は心休まる小説や随筆が多くなってしまった。そんなわけで、大学の教師としての読書量はきわめて少ないものと自覚(反省)せざるを得ない。それでも、好きな本や、勉強させられた本、印象深かった本は頭に浮かぶ。

教養教育院の教員として全学教育の一部を担当

してから2年が経過する。担当講義は、私自身の40年間の研究領域であった食・栄養・生化学・動物・ニワトリを中心に組み立てた。講義の狙いは、私たちにとって身近でしかも大切な「食と栄養」そして「鳥類やペットなどの身の回りにいる動物」をよく観察し、ヒトと生物たちの「生命の営みとその不思議さ」を考えることを通して、身近な事象と視点から「科学する」することの楽しさを身に付けてもらうこと、と私は考えている。

ここに紹介する書籍は、私が読んで自身の生活に役立った本、楽しかった(良かったと感じた)本である。いくつかは私の専門分野と講義内容に少し関連し、いくつかは関係なく感銘した本、そして気持ちが落ち着く本、楽しかった本、である。

何といっても、本を好きになること、そのために好きな本を見つけること、好きな本に出会うための少しの努力をすること、が大事のように思う。学生時代は、ジャンルにこだわらず何でも読める、何でもチャレンジできる、しかし過剰に気負うことなしに過ごせる、長くはない貴重な期間と捉えたい。

(2010年2月)



■ 木下 是雄 著

理科系の作文技術

中公新書、1981年

小中学校時代に課せられた「作文」そして「読書感想文」がきらいだった。人を感動させるような「感想」はとても書けなかった。このように「作文」「文章づくり」「レポートづくり」は苦手のままに過ごしてきたが、大学院学生時代に私の恩師である松

本達郎教授にこの本を紹介され、そして読破してからは、文章に対する苦手意識がほぼなくなった。そしていろいろな報告の文章や本でも、この「理科系の作文技術」を頭に思い出しながら味わうことができるようになった。

レポートなどを書くためには、主題を決定してその材料を集め、パラグラフを構成して文を組み立てる。その中で、事実と意見を明確に区別する、読む対象者を意識して結論を早めに提示する、わかりやすく短い文章にする、漢字を使いすぎない(文を黒くしすぎない)、同じ語尾の繰り返しは使わない、など、多くの注意点が示され、今でも私の中に生きている。小学校・中学校教育の中では「主観的記述」を植えつけられてきた面が強いが、大学および社会では調査報告、出張報告、技術報告、開発計画の申請書など「客観的記述」を求められる場面が多いのではない。

私自身、これまで大変参考になった「指南書」である。



■ 本川 達雄 著

ゾウの時間 ネズミの時間 —サイズの生物学—

中公新書、1992年

私は40年以上にわたって「動物栄養生化学」を勉強し、研究し、それらを学生たちに指導してきた。栄養学、栄養生化学は動物の体と生命の科学であり、その形態と機能に密接に関連するものである。私の恩師の一人である堀口雅昭教授からは動物栄養学

を全動物の体のサイズから認識することの大事さを指導していただき、エネルギーの流れやエントロピーの教えもいただいた。本書は、動物のサイズから動物の行動、動物のデザイン、動物の機能を解釈しようとしたものであり、ネズミからゾウにいたるまで全動物に通じる理論を導き出そうとする書である。

動物のサイズによってその動物が感じる時間が異なること、動物の行動圏と食事量、動物の運搬コスト、動物サイズと呼吸数や心拍数の関係などが論理的に展開されている。また一生の間の心拍数や呼吸数は動物のサイズに関係なくほぼ同じであり、動物のエネルギー消費量は体重の3/4乗に比例することなど、生物と生命を理解する意味でよ心に残りやすい記述が多い。

本書全体がわかりやすい文章で構成されており、生物学を学んでこなかった学生にも手に取りやすい新書(230頁)であり、動物世界を理解し、生命を思い、そして私たち自身を考える観点を提供してくれる本の一つといえる。



■ 安田 喜憲 著

■ 森と文明の物語 ―環境考古学は語る

ちくま新書、1995年

私の専門は農学であり、「農」は人類が長年にわたって築き上げてきた壮大な知恵であり、文化を作り出す源である、と学生に教えてきた。5000年も前に誕生した都市文明はいまや地球環境を破壊しかねない文化へと展開してしまったのを、私たちは目

にしている。

本書（著者は東北大学の卒業生）では、文明の発祥の地であるメソポタミアやその周辺領域では豊かな森が存在したが、その名残りは地中海沿岸に少しだけ残っている巨大なレバノン杉に見られるのみで、現在ではこの地域にいわゆる森は無い、と述べられている。もともと文明と森は共存していたのだが、文明の深化とともに破壊された森林、森林争奪戦争だったというトロイ戦争、地中海沿岸での森林伐採後の代替として植栽されたオリーブの木、消えたモアイの森の話など、化石や花粉の分析と放射性炭素などの技術を用いた環境考古学を駆使しての森林の盛衰を語る本書は、「文明・環境・農」を考える意味でも多くの視点を与えてくれる。そして、私たちの身近にある里山の森の歴史と機能から、「共生の森」の保存を論じていることに心を傾けたい。

関連する書籍として、『森林の思考・砂漠の思考』、鈴木秀夫著、NHK プックス（1994年）も面白い。



■ 千葉 成夫 著

■ 奇蹟の器 ―デルフトのフェルメール―

五柳叢書、1994年

いつから絵好きになったのか、好きといっても油絵を描くわけではなく、見るのが少し好きなだけだ。オランダ、デルフトの画家フェルメールの作品を初めて観たのは国立西洋美術館の特別展での「手紙を書く女」である。静謐で時が止まり、手紙を書く女

性の遠くを想う心がにじみ出ている画面に惹かれた。

本書はフェルメールの作品から著者が独断で選んだ数点の作品（私の好きな数点でもある）について、フェルメール自身がどんな想いで何を描こうとしたのか、観る人が作品から何を感じるのか、などを述べたものであり、奇蹟の器であるフェルメールの絵を心底から愛する著者の姿勢が浮かびあがる。

一般美術書にあるように作者と作品の歴史を紹介してはいるが、それよりも、フェルメールの絵に対する著者（東北大学の卒業生）の深い思い入れに基づいた文学作品的な印象を私は受けており、美術書としては少し変わっているのかもしれない。フェルメールの美術書を何冊か読んだが、フェルメールの作品の紹介などは『謎解き フェルメール』小林頼子・朽木ゆり子（共著）（新潮社、2003年）がお勧めだろう。

絵は本を読むよりも、直接観て、感じることにあつた。フェルメールの30数点の作品のうち、これまで約半分は観ることができた。



ピーター・メンツェル／フェイス・ダルージオ 著

地球の食卓 —世界24か国の家族のごはん—

みつじ まちこ 訳、TOTO出版、2006年

食べ物の写真を見るのはとても楽しい。どんな人たちがどんな食事をしているのかを知るのも楽しい。食は等しく人間の生活の基本であり、外国に旅行した時、私はいつも食の市場を訪れる。市場の多様な食材、そしてその国特有の食品を見ると、その国と

住む人々の大半を理解できたような気分になる。

本書は、世界のいろいろな人種の家族と1週間分の食品のポートレイト、食事風景を中心としたルポルタージュであり、それぞれの家族の1週間分の食品、各家庭のご自慢のレシピ、食の問題を提起する6つのエッセイを収録した写真集である。豊かな環境で豊富な食材を使い、幸せそうに写る家族、そして片方では、厳しい環境で数少ない食料・食品を囲む固い顔の家族の写真もある。本来楽しかるべき食卓・食品の前での写真も、場所によっては苦しい悲しい絵に思える。心に重く響く写真集でもある。世界人口68億人のうち、約十数億人は飢餓に近い状況にあること、そして一方では有り余る食料の中で肥満に苦しむ十数億の人たちがいることを思い起こさせる。

しかし、家族がいる食事風景はやはり人の心を安んじさせることは間違いない。食について考え、学ばず学生に限らず、本書を見てみる価値はありそうだ。



東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」(編)

人間と環境のコミュニケーション農学 —杜の都からの発信—

農林統計協会、1997年

これは手前味噌の本の紹介になる。この手の話を嫌う人は多いと思うが、その人たちには下記の拙文はスキップしていただくを得ない。

これまで(特に1990年代までに)農学は少し分かりにくい、農学の方向性が紹介されていない、農学

が過小評価されているなど、農と農学に関する多くの意見・懸念が出されてきた。本書は食料問題、環境問題、資源問題などの深刻化が予測される21世紀に向けて、農学の果たすべき役割とその将来ビジョンを発信したものである。私を含めた農学部5人の若手教授(1995年当時)が3年余りの議論を経て、農の歴史を踏まえて今世紀における農学の役割を「コミュニケーション」というキーワードから展望したものである。本書の中にあるように、私たちの生活そして科学の中で「生命の神秘」「生命のゆらぎ」「生命生理の多様性と可塑性」をコンセプトにする「農学的思考」を身につけることは、多様な視点形成が重要視され、環境の時代ともいわれる今世紀の私たちに、なお一層望まれているように感じられる。

長大な農の歴史に思いを馳せるとともに、農が20世紀までに造り上げてきた功罪を見据えながら、農と農学と人間の行きかたに触れてみるのも楽しいのではないかな。

海野 道郎

UMINO, Michio

退職

教育・研究の舞台裏

— 私を支え・慰め・励ましてくれた本 —



海野 道郎 UMINO, Michio

総長特命教授(2008年度～2010年度。2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院文学研究科)、工学修士
専門分野:数理計量社会学、環境社会学

※2010年度

基礎ゼミ:「人と社会—未知の世界を拓く—」/「事実を探る—情報と現実の間—」

基幹科目:「社会の構造:社会の成り立ち—ミクロレベル—」/「社会の構造:社会の成り立ち—マクロレベル—」

総合科目:「社会的ジレンマ:環境問題の基本メカニズム」/「社会的決定を報道に見る」

担当科目

「チリリンチリリンじてんしゃが、おやまのみちをと
おってく」と始まる本があった。ロクちゃんという子
供が、いろいろな動物たちに巡り合う。白い髭を生
やしたヤギのおじさんに出会ったロクちゃんが問い
かけ、おじさんが答える、「おじさん、おひげはな
ぜしろい。／ちいさいときにしろいこめ、たくさん
たべたでしろいのだ。／ロクちゃんこっくりうなづい
た」。——「白い米」が憧れの時代だったのだ。この、
小さい頃読み聞かせられた絵本が、私の記憶に
残っている最初の本だ。

少年時代に出会った本の中でも、湯川秀樹監修
『理科図鑑』は忘れがたい。湯川秀樹のノーベル
物理学賞受賞(1949年)が契機となったと思われる
この本を、私は頁がばらばらになるまで読み込んだ。
『理科教室:ケンちゃんの不思議』(著者失念)
は、科学する心を育ててくれた。オパーリン『生命
の起源』は、生物から化学に私の関心をシフトさせ
た。こうした読書経験は、小学校以来の小動物飼
育や中学・高校時代の化学実験の経験と相まって、
大学受験に際して迷うことなく理科系を選ばせた。

しかし、私は今、文学研究科出身の総長特命教
授として、君に語りかけている。その間の事情を
記す余裕はないが(とりあえずは、中村捷編2005
『人文科学ハンドブック』東北大学出版会、193頁

を参照)、私は大学院の途中で社会科学に転じ、環
境や不公平などに関する社会意識の分析や、個人
の意思決定と社会的決定との関係についての理論
分析に携わってきた。授業では、そのような問題を通
して、受講者の皆さんが感性豊かな論理的思考
力を身につけるのを援助したいと思っている。

以下に選んだ6冊は、必ずしも私の専門分野(社
会意識の数理・計量社会学)の本ではない。社会科
学者としての私の進路を決定付けた専門書は、個人
的には重要な本だが、ここで紹介しても、ほとんど意
味がない。授業の中で紹介する本は、シラバスを見
ればよい。また、専門分野を離れた本であっても、高
村薫『太陽を曳く馬』(新潮社、2009年)のような新
刊書や立花隆+立花ゼミ『二十歳のころ』(新潮文庫、
2002年)のような学生の目に付きやすい本、『方丈
記』のような誰でも知っている本(私は、海外出張の
ときに携えていくことが多い)は除いた。こうして選
ばれた本は、君の専門分野が何であろうと読むこと
ができ、しかも、君の精神を鍛えしなやかにしてくれ
るだろう。じっさい、過半の本は、私が理科系の学生・
院生だった頃に読み、その後も折に触れて頁を繰り、
今なお、敬意と愛着を抱いている本である。大学入
学以後の私を支え・慰め・励ましてくれた本でもある。
(2010年2月)



■ プラトン 著

国家 (上・下)

藤沢 令夫 訳、岩波文庫、1979年、原著BC4世紀

ギリシャ時代の哲学書など難しそうだし、国家のことなど自分には関係ない、と君は思うかもしれない。しかし、君が実際にこの本を読み始めるなら、それが2つとも誤りであることに気づくはずだ。

第一に『国家』は読みやすく面白い。プラトンの

師ソクラテスを中心とした対話が続く中で、しばしばどんでん返しが起こる。「なるほど、そうだ」と思っていると、実はその考えに問題があることが述べられる。そのようにして、探求が深まりを見せる。その「劇」を見ながら、あるいはそれに参加しながら、読者の思索は深められ、知的なやかさが養われる。

第二に、この本は君のための本でもある。なぜなら、副題「正義について」が示唆するように、この本は、正義の意味を探求し、幸福との関係を論じているからだ。そしてそれは、これまでの自分から脱皮して新しい精神をもった自己を構築し直す時機にある君が、正に考えるべき問題だからだ。しかも、それなくしては、友人関係も部活動も長続きしない。社会の基本問題でもある。この本は、社会の中に生きる自我を確立しようとする君にとって、不可欠な本になるだろう。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』(岩波文庫)は、この問題を、さらに体系的に論じている。



■ 桑原 万寿太郎 著

動物の体内時計

岩波新書、1966年(絶版)

ミツバチは時間感覚を持っているのだろうか。ある日、研究者の食卓にあるママレードに、一匹のミツバチが訪れた。やがて、多くのハチが食卓を訪れるようになった。彼が毎日同じ時間に朝食を食べていると、ハチたちはその時間帯には来るが、他の時

間帯にはほとんど訪れない。試みに5日目にはママレードを出さなかったが、朝食時刻になると大勢のハチが来た。

しかし、これだけでは、ミツバチが時間感覚を持っている証拠にはならない。同じ現象が、他の理由によって生じる可能性もあるからだ。こうして研究は始まり、ミツバチのコミュニケーションとそれを支える体内時計の機構が明らかにされていく。

この本は、かなり古い本であり、書かれている個々の事実については、その後の修正があるかもしれない。しかし、新たな観察や実験とともに科学的発見が次々になされていく過程と、それを生み出す科学的探究の精神は鮮やかだ。学生諸君には是非、その醍醐味を味わい身につけて欲しい、と私は思う。

科学的探究について記し同じような感動をもたらしてくれた本には、同じ著者による『動物と太陽コンパス』、東北大学教授だった栗原康による『有限の生態学』など、多くの良書がある。



木下 順二 著

風浪

『風波・蛙昇天』木下順二戯曲選Ⅰ、岩波文庫、1982年、
原著1962年

現代の日本社会は明治初期や第二次世界大戦後と並ぶ激動期にある、と言われる。その中で青年期を迎えた君にとって、明治初期の熊本を舞台としたこの戯曲は、共感とともに読むことができるだろう。

社会の変動期には、次の社会を形成するさまざま

な思想が提唱される。明治初期の熊本では、横井小楠を師と仰ぐ実学党、朱子学に依る学校党、神道系の敬神党などが並立し、それぞれの思想によって新しい社会を創造しようとしていた。さらに、キリスト教も入ってきた。このような社会状況の中で、志を持つ青年たちは、それぞれの道を追求する。

しかし、主人公・佐山健次は、どの思想にも共感する面を見出しながら、どの一つにも入り込めない。神風連事件前後の激動期に生きる佐山の葛藤を中心テーマとして、この戯曲は展開する。

大学生となり、これまでの自分から人間的・思想的に脱皮する時機を迎えた君にとって、佐山の葛藤は他人事ではない。

木下順二は、『夕鶴』などの民話劇作家である以上に現代劇作家である。『風浪』を読んだ後には、第二次世界大戦中のスパイ事件を題材にした『オットーと呼ばれる日本人』や戦後の極東軍事裁判をめぐる『神と人との間』など、多くの作品に進んで欲しい。



井上 ひさし 著

吉里吉里人（上・中・下）

新潮文庫、1985年、原著1981年

読み方によっては、荒唐無稽な娯楽小説である。

売れない小説家・古橋健二が、取材のために東北本線で一関付近を北上中に、吉里吉里国の独立運動に巻き込まれ、ひょんなことから大統領にまでなってしまう。この間に生じる種々の出来事が、

『ひょっこりひょうたん島』の作者によって描かれている。寝転がって笑いながら読むことができる。

しかし、この小説は、それ以上に思想小説である。

吉里吉里村は、面積40平方キロ弱、人口4千人余の小さな村に過ぎない。しかし、食料は自給可能であり、先進的医療技術を誇る病院を経営し、行政は極端に簡素化され、金本位制度の導入によって国際企業からも支持を得ており、日本国からの独立が法的にも経済的にも可能である。そこで、この小さな村は、自分たちの理想の実現を目指し、日本国から独立しようとする。周到な準備を経て始まったその運動は、しかしながら、独立を阻もうとする日本国の力によって潰されていく。その過程を見ながら、我々が日ごろ当たり前だと思っている物事が、次々に俎上に載せられていく。

この小説は、固定観念に縛られがちな我々の思考を解放し、自由な精神に導いてくれる。高橋和己『邪宗門』とは対照的なユートピア小説である。



■ 森 有正 著

バビロンの流れのほとりにて

『森有正エッセー集成！』ちくま学芸文庫、1999年、
原著1957年

東京大学文学部助教授だった森有正は、1950年、船でフランスに旅立つ。40歳を前にしての渡仏だった。そして、その3年後、一連の思索を、次のような文で始めた。——「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、

その本質において、残るところなく、露れているのではないだろうか。」

当初は数年のつもりだった森有正のフランス滞在は、結局、彼の死まで続き、この書簡体の文章もまた、彼の生涯に渡って綴られることになって、彼の思想を今に伝えてくれる。ここには、初代文部大臣・森有礼の孫であり、キリスト教の牧師の子として生まれ、フランスの修道会が設立した小中学校で学び、デカルトやパスカルの研究者として研鑽を積んだ森有正が、フランス文化（あるいは、西欧の精神）と格闘せざるを得なかった過程が書き留められている。そこに描かれるのは、凡百の旅行記や紹介文が描くフランスとはまったく異質の、深く硬質な世界である。

この本に私が出会ったのは、1968年、日ごとに変わる喧騒の中で、しかもなお静かに深く考えることを教えてくれた本であった。

森有正は晩年、『生きることと考えること』（講談社現代新書）などの親しみやすい本も残している。



■ 加藤 周一 著

読書術

岩波現代文庫、2000年、初版1962年

どういう本を読んだらよいかについては論じようがないが、どう読んだらよいかは一般論として論じられる。著者はそう考え、自らの読書術を公開する。

その技術は多面的である。急がば回れ、古典を味わう精読術。新刊を数でこなす速読術。臨機応変、

読まずにすまず読書術。原著に挑み、原語に触れる解読術。新聞・雑誌の看破術。難解な本をとりこむ読破術。それぞれが、豊富な例示とともに語られる。

中でも私が気に入ったのは、最終章「難しい本の読破術」である。この章は、いきなり、「わからない本は読まないこと」という助言で始まる。第一に、難しい本の大部分は、文章が下手か、著者が自分の言うことを十分に理解していないかである。第二に、立派な本の中にもある難しい本の場合には、分からない理由が読者の側にある。その種の本の理解には、単語の意味の正確な理解だけでなく、著者の経験とほとんど同種の経験を持っていなければならない、という。この主張には一瞬たじろぐが、「私にとってむずかしい本は私にとって必要でなく、私にとって必要な本は私にとってかならずやさしい」という言葉に力づけられる。

医学から出発して東西の文化を論じた当代随一の知性・加藤周一の言葉だけに、傾聴の価値があろう。

本誌の書籍紹介一覧

書籍名	著者 翻訳	発行年（原書）	
大森荘蔵セレクション	大森荘蔵著 飯田隆／丹治信春／野家啓一／野矢茂樹（編）	2011年	
「科学的思考」のレッスン ―学校では教えてくれないサイエンス―	戸田山和久著	2011年	
沈黙の春	レイチェル・カーソン著 青樹築一訳	1974年	
遠野物語	柳田國男著	1991年	
罪と罰（1～3）	ドストエフスキー著 亀山郁夫訳	1：2008年 2・3：2009年	
寺山修司全歌集	寺山修司著	2011年	
アメリカのデモクラシー （第1巻上・下、第2巻上・下）	トクヴィル著 松本礼二訳	第1巻：2005年 第2巻：2008年	
野生の思考	クロード・レヴィ＝ストロース著 大橋保夫訳	2006年（1976年）	
国家はなぜ衰退するのか ―権力・繁栄・貧困の起源―（上・下）	ダロン・アセモグル／ジェイムズ・Ａ・ロビンソン著 鬼澤忍訳	2013年	
神々の沈黙 ―意識の誕生と文明の興亡	ジュリアン・ジェインズ著 柴田裕之訳	2005年	
日本辺境論	内田樹著	2009年	
キッシンジャー回想録 中国 （上・下）	ヘンリー・Ａ・キッシンジャー著 塚越敏彦／松下文男／横山司／岩瀬彰／中川潔訳	2012年	
英語とわたし	岩波新書編集部編	2000年	
翻訳の秘訣：理論と実践	中村保男著	1982年	
英語の感覚・日本語の感覚： ＜ことばの意味＞のしくみ	池上嘉彦著	2006年	
日本語教室	井上ひさし著	2011年	
ことばと文化	鈴木孝夫著	1973年	
日本の文化構造	中西進著	2010年	
植物が地球をかえた！	葛西奈津子著	2007年	
生命と地球の歴史	丸山茂徳／磯崎行雄著	1998年	
光合成とはなにか ―生命システムを支える力―	園池公毅著	2008年	
光合成の科学	東京大学光合成教育研究会編	2007年	
植物の私生活	デービッド・アッテンボロー著 門田祐一監訳、手塚勲／小堀民恵訳	1998年	
100億人への食糧 ―人口増加と食糧生産の知恵―	Ｌ・Ｔ・エヴァンス著 日向康吉訳	2006年	
風土 ―人間学的考察―	和辻哲郎著	1979年（1935年）	
農業の基本価値	大内力著	2008年（1990年）	
世界を不幸にしたグローバリズムの正体	ジョセフ・Ｅ・スティグリッツ著 鈴木主悦訳	2002年	
ショック・ドクトリン（上・下） ―惨事便乗型資本主義の正体を暴く―	ナオミ・クライン著 幾島幸子／村上由見子訳	2011年	
経済大陸アフリカ ―資源、食糧問題から開発政策まで―	平野克己著	2013年	

	出版社	シリーズ	版 型	ページ	定 価
	平凡社	平凡社 ライブラリー	HL 判	496p	1700円＋税
	NHK 出版	NHK 出版新書	新書	304p	860円＋税
	新潮社	新潮文庫	文庫	342p	670円＋税
	集英社	集英社文庫	文庫	264p	514円＋税
	光文社	光文社古典新訳 文庫	文庫	1：488p 2：465p/3：536p	1：819円＋税/2：800円＋税 /3：876円＋税
	講談社	講談社学術文庫	文庫	350p	1100円＋税
	岩波書店	岩波文庫	文庫	第1巻上364p／下480p 第2巻上282p／下327p	第1巻上900円＋税／下1040円＋税 第2巻上780円＋税／下 840円＋税
	みすず書房		A5	408p	4800円＋税
	早川書房		B6	上360p/ 下358p	各2400円＋税
	紀伊國屋書店		A5	632p	3200円＋税
	新潮社	新潮新書	新書	255p	740円＋税
	岩波書店		四六判	上342p／下342p	上2800円＋税／下2800円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	228p	品切重版未定
	新潮社	新潮選書	B6	247p	—
	NHK 出版	NHK ブックス	B6	256p	970円＋税
	新潮社	新潮新書	新書	186p	680円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	209p	720円＋税
	岩波書店		四六判	386p	3600円＋税
	化学同人	植物まるかじり 叢書	四六判	160p	1200円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	282p	840円＋税
	講談社	ブルーバックス	新書	261p	940円＋税
	東京大学出版会		A5	304p	3800円＋税
	山と溪谷社		B5変型	320p	絶版重版未定
	学会出版センター		A5	290p	絶版重版未定
	岩波書店	岩波文庫	文庫	299p	900円＋税
	創森社		四六判	216p	1600円＋税
	徳間書店		四六判	390p	1800円＋税
	岩波書店		四六判	上402p／下406p	2500円＋税 2500円＋税
	中央公論新社	中公新書	新書	304p	880円＋税

書籍名	著者 翻訳	発行年（原書）	
新・環境倫理学のすすめ	加藤尚武著	2005年	
人類の足跡10万年全史	スティーヴン・オッペンハイマー著 仲村明子訳	2007年（2004年）	
数学をつくった人びとⅠ、Ⅱ、Ⅲ	E・T・ベル著 田中勇／銀林浩訳	2003年（1937年）	
素数の音楽	マークス・デュ・ソートイ著 富永星訳	2013年（2005年）	
ガン回廊の朝（あした）（上・下）	柳田邦男著	1981年（1979年）	
石巻赤十字病院の100日間 ―東日本大震災 医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録―	石巻赤十字病院著、由井りょう子文	2011年	
津波と原発	佐野眞一著	2011年	
物理学はいかに創られたか（上・下）	アインシュタイン／インフェルト著 石原純訳	1963年 （上1939年／下1940年）	
科学と仮説	ポアンカレ著 河野伊三郎訳	1938年	
寺田寅彦随筆集【全5冊】	寺田寅彦著 小宮豊隆編	1・2:1993年（1947年）/3・4:1983年 （1948年）/5:1986年（1948年）	
目に見えないもの	湯川秀樹著	1976年	
二重らせん ―DNAの構造を発見した科学者の記録―	ジェームズ・D・ワトソン著 江上不二夫／中村桂子訳	2012年（1968年）	
おはなし電気學	佐野昌一著	1939年（絶版）	
職業としての政治	マックス・ウェーバー著 脇圭平訳	1980年（1919年）	
社会科学における人間	大塚久雄著	1977年	
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神	マックス・ウェーバー著 大塚久雄訳	1989年（1920年）	
近代の政治思想 ―その現実的・理論的諸前提―	福田歓一著	1970年	
忠誠と反逆 ―転形期日本の精神史的位相―	丸山眞男著	1998年	
書書周游【萩原延壽集5】	萩原延壽著	2008年	
理科系の作文技術	木下是雄著	1981年	
ゾウの時間ネズミの時間 ―サイズの生物学―	本川達雄著	1992年	
森と文明の物語―環境考古学は語る	安田喜憲著	1995年	
奇蹟の器―デルフトのフェルメール―	千葉成夫著	1994年	
地球の食卓 ―世界24か国の家族のごはん―	ピーター・メンツェル／フェイス・ダルージオ著 みつじまちこ訳	2006年	
人間と環境のコミュニケーション農学 ―社の都からの発信―	東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」編	1997年	
国家（上・下）	プラトン著 藤沢令夫訳	1979年（BC4世紀）	
動物の体内時計	桑原万寿太郎著	1966年（絶版）	
風浪【木下順二戯曲選1 より】	木下順二著	1982年（1962年）	
吉里吉里人（上・中・下）	井上ひさし著	1985年（1981年）	
バビロンの流れのほとりにて 【森有正エッセー集成1 より】	森有正著	1999年（1957年）	
読書術	加藤周一著	2000年（1962年）	

	出版社	シリーズ	版 型	ページ	定 価
	丸善出版	丸善 ライブラリー	新書	228p	780円＋税
	草思社		四六判	416p	2400円＋税
	早川書房	ハヤカワ文庫	文庫	I：421p／II：421p ／III：392p	各980円＋税
	新潮社	新潮文庫	文庫	622p	890円＋税
	講談社	講談社文庫	文庫	上329p／下321p	品切重版未定
	小学館		四六判	228p	1500円＋税
	講談社		四六判	254p	1500円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	上177p／下194p	700円＋税 740円＋税
	岩波書店	岩波文庫	文庫	296p	700円＋税
	岩波書店	岩波文庫	文庫	1：305p／2：316p／3：332p ／4：307p／5：310p	1・3・5：700円＋税 2・4：660円＋税
	講談社	講談社学術文庫	文庫	164p	660円＋税
	講談社	ブルーバックス	新書	245p	900円＋税
	明治書院	科学知識普及會	四六判	486p	—
	岩波書店	岩波文庫	文庫	121p	480円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	226p	760円＋税
	岩波書店	岩波文庫	文庫	436p	1000円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	201p	700円＋税
	筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	512p	1400円＋税
	朝日新聞出版		四六判	336p	2600円＋税
	中央公論新社	中公新書	新書	256p	700円＋税
	中央公論新社	中公新書	新書	240p	680円＋税
	筑摩書房	ちくま新書	新書	208p	660円＋税
	五柳書院	五柳叢書	四六判	240p	2427円＋税
	TOTO 出版		224× 304mm	288P	2800円＋税
	農林統計協会		B5	124p	2400円＋税
	岩波書店	岩波文庫	文庫	上456p／下493p	各1100円＋税
	岩波書店	岩波新書	新書	201p	—
	岩波書店	岩波文庫	文庫	339p	700円＋税
	新潮社	新潮文庫	文庫	上501p／中502p ／下520p	各710円＋税
	筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	576p	1500円＋税
	岩波書店	岩波現代文庫	文庫	232p	960円＋税



発行日:2014年3月1日

発行者:東北大学 教養教育院

〒980-8576 仙台市青葉区川内41(川内キャンパス内)

Tel:022-795-4723 Fax:022-795-7540

<http://www.las.tohoku.ac.jp>

e-mail info@las.tohoku.ac.jp

COPYRIGHT©TOHOKU UNIVERSITY ALL RIGHTS RESERVED.

本冊子の記載記事・写真などを了承なく転載することはできません。